リリカル銀魂　Ｓｔriker～侍少女と召喚獣

咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒ～侍少女と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ７０６４Ｖ

【作者名】
咲夜

【あらすじ】
これは黒神さんから許可を頂いたリリカル銀魂の小説を自分なりにアレンジを加えた小説です。一応コラボをする予定の作品はなのはと銀魂以外にはバカとテストと召喚獣と金色のガッシュベル、リトルバスターズ、仮面ライダーオーズ、ブリーチです。もしかしたらもっと増やすかもしれません。不定期更新になりますけど必ず完結させる予定です。

初めに

初めまして作者の桜です。
自分はまだ小説を書くのに慣れていないので誤字脱字があるかもしれません。もし誤字や脱字があったら指摘をしてくれると嬉しいです。

まずこの小説の注意点を初めに挙げておきます。

・銀さんが転生して違うキャラになってしまいます（女になる）

・仮面ライダーオーズのキャラが出てくるわけではなく武器だけのコラボです。

・ブリーチもキャラが出てくるわけではなく武器だけのコラボです。

・リトルバスターズのキャラは一人しか出てこない

・新八がデバイズ？を手に入れる。

・新八に彼女が出来る（誰かは内緒です）

・この小説のなのは銀さんに惚れていない。

・キャラ崩壊の可能性がある

・リリカル銀魂を書いている他の作者みたく最初にリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓの世界に飛ばされるわけではなく最初から居る。

もしこれらの事が許せない人が居たらこの小説を読む事はおススメできません

初めに（後書き）

おかしい所があったら教えて下さい。

本編の方は出来るだけ早く更新します

第一訓　物語はいつ始まるか分からない（前書き）

本編を更新します。

第一訓　物語はいつ始まるか分からない

此処は管理外世界。人の気配がまるでしない世界に三人の人影があった。

???

「あーあ、めんどくせぇ、何で俺がこんな事をしなきゃいけないんだ？」

と言うのは着物を着た天然パーマの銀髪の侍。『ジュエルシード事件』や『闇の書事件』で魔力を全く使わずに純粋に剣の腕だけで解決したと言われている武神、坂田銀時だ。
彼は数週間前に平賀源外の発明のせいで新八、神楽、桂、エリザベスと共に再びリリカルなのはの世界に飛ばされてしまった。

???

「それはしょうがないよ。だって銀時は一応機動六課のメンバーなんだし、私達に協力してくれても良いと思うけど……」

銀時にそういうのは金髪のロングヘアーで執務管の様な制服を着た女性、フェイト・テスタロッサだ。
彼女はかつて『ジュエルシード事件』の容疑者であったが、銀時に救われて以来彼に惚れてしまったらしい。

銀時
「でもよー」

フェイト
「もし協力してくれたらチョコレートパフェを奢るよ」

銀時
「よっしゃーッ！！やってやるぜぇーッ！！」

チョコレートパフェを奢るというフェイトの言葉に１８０度がらりと銀時の態度が変わる。

？？？
「ア、アハハハハ……銀さんって意外と現金なんですね」

苦笑いを浮かべるのはフェイトと似た様な執務管の制服を着た茶髪でポニーテールの女性、高町なのはだ。彼女も銀時と同じように『ジュエルシード事件』『闇の署事件』を解決した立役者であり、フェイトとは十年以来の親友だ。

銀時
「んで、今回の任務はどんな物なんだ？」

フェイト
「うん、今回の任務は管理外世界にロストギアが発見されたからその回収、封印かな」

フェイトは自分の愛機である『バルティシュ』に今回のデータを出しながら答える。

銀時
「おいおい、ロストギアって危険な物なんだろ。素人の俺に手伝える事はねぇぞ」

なのは
「大丈夫ですよ。銀さん。今回のロストギアは何も危険がありませんし、念の為に私達ＳＳＳランクの魔導師がついて来たんですから」

確かになのはの言うとおり今回の任務にＳＳＳランクの魔導師のなのはとフェイトの二人が着くことになった。しかし銀時にはまだ疑問があった。

銀時
「そんな簡単な任務なら俺達じゃなく他の奴らがやれば良いんじゃねぇか。それなのに何で俺達に頼んだんだ？」

フェイト
「私も銀時と同じ事を思ったよ。でも管理局の他の部隊は忙しかったみたいでこの任務を受ける暇がなかったみたいなんだ。それで空いている機動六課に回って来たんだよ」

フェイトが言うのは今回の任務は他の部隊は受ける暇が無かったらしい。
それでロストギアの回収の専門部隊であり、何の任務を受けていない機動六課に回ってきたみたいだ。

銀時
「……何かそれ怪しくねぇ？」

フェイト
「えっ？」

銀時
「だってよ、機動六課以外の部隊は全て任務で埋まっているこんな状況で簡単な任務が回ってくるなんて怪しい匂いがプンプンするんだよな」

フェイト
「……考え過ぎだよ。銀時。自分達の部隊以外が任務で埋まっているのはよくある事だし、それに機動六課はロストギアを回収する部隊だよ。何も怪しくはないよ」

こういう状況が前に何度もあったらしく今回の任務は何も怪しくはないとフェイトは言う。

銀時
「そうは言うけどよ。この任務は嫌な予感がするんだよな。虫の知

らせってやつ？」

頭を掻きながら銀時は言った。

銀時達が居る場所から更に奥に進んだ暗い森の中。
そこにある反管理局組織の研究所に黒い髪で赤い着物を着て片目に包帯を巻いた男が入っていくと、髪がボサボサで無精髭を生やした白衣を着た男が出迎えた。

研究委員
「……お待ちしていました」

???

「御託はいい、んで、頼んでいた物は出来ているんだろうな」

研究委員
「それはもちろんです」

白衣を着た男はそう言ってパソコンを動かす。
すると、中央の床が開き、そこからカプセルに入った紫色のロストギアが出てくる。

研究委員
「これが高杉様が言っていた時空移動型ロストギア『セルビア』です」

高杉
「ほぅ、これがねぇ……それでコイツの効果はどんな物なんだい？」

怪しく輝くロストギアを手に取り、高杉と呼ばれた人間は白衣を着た男に聞いた。

この高杉―――高杉晋介と呼ばれた人物は銀時達と同じ世界からリリカルなのはの世界に来た人間であり、

かつての天人との戦『攘夷戦争』で共に戦った仲間でもある。そして今は銀時達の最大の敵だ。

研究委員
「はい、このロストギアの能力は対象物を含めた人物や建物、三キロ以内にある物を全て虚数空間に飛ばされます。既にこのロストギアのデータを管理局に送っているのでもうすぐ機動六課の局員が来るでしょう」

高杉
「ほぅ、どうしてそんな事が言える？」

研究委員
「機動六課はロストギアを回収する専門の部隊です。他の部隊は手が空いていませんので必然的に機動六課にこロストギアを回収する任務に着く事は間違いないからですよ」

高杉
「ククク……説明をありがとうよ」

高杉は話を聞き終わると後ろを向き、出口に歩いていく。

高杉
「銀時よォ、悪いがお前にはあの目障りな機動六課の奴らと一緒に消えて貰うぜ。俺達の計画に邪魔になるからよ」

キセルを吹かしながら高杉が呟いた言葉は暗闇の中に消えていった。

第一訓　物語はいつ始まるか分からない（後書き）

うう……もの凄い駄文だ。
しかも最後は無理矢理過ぎた感じがする。
銀時達の口調はこれで合っているのか不安だ…

銀時「まぁ、作者の愚痴はほっといて次回予告をするぞ」
フェイト「『簡単な任務ほど罠の場合が多い』でテイクオフ！」

誤字脱字があったら教えてください。感想を待ってます

第二訓　簡単な任務ほど罠の可能性がある（前書き）

更新します

第二訓　簡単な任務ほど罠の可能性がある

高杉が去って数時間後に銀時達は暗闇の中に立たすむ怪しい研究所の前に立っていた。

銀時
「おいおい、如何にも何か出そうな雰囲気なんですけど、俺、こういう所は一番苦手なんですけど！！」

冷や汗を大量に流しながら銀時は叫ぶ。

フェイト
「大丈夫だよ銀時。幽霊なんて今の魔法社会に居るわけがないよ」

暖かい目で銀時を見つめながらフェイトは言った。

銀時
「あれ？フェイトちゃんってそんな性格だっけ？てゆうかそんな目で俺を見つめないで、銀さんのライフポイントが物凄い勢いで減っているから！！」

冷や汗だけじゃなく今度は目から暖かい水が流れ出した事を手で隠しながらフェイトに言った。

なのは
「もう銀さん、フェイトちゃん。ふざけていないで早くロストギアを回収するよ」

なのははふざけている銀時とフェイトに注意すると真面目な表情になった。

なのは
（データによるとロストギアがあるのは遺跡の中のはずなのに何でこの建物の中にあるの？それだけじゃない此処は管理外世界だからこんな研究所があるのは明らかに不自然すぎる……）

そう結論に達したなのはは再び銀時達に向き直りこう言った。

なのは
「フェイトちゃん、銀さん。さっきに行ってロストギアの回収と封印をお願いできるかな」

急に真面目な表情でロストギアの封印を頼まれたフェイトと銀時は周りを警戒しながら聞き返した。

フェイト

「……どうしたの、なのは？もしかして敵が近くにいるの？」

なのは
「ううん、そうじゃないから大丈夫だよ……ちょっとこの研究所を詳しく調べるだけだから」

なのはは銀時達にそう言い残して研究所に入っていく。

フェイト
「いきなりどうしたんだろうなのはは？」

銀時
「さぁな、それよりも早くロストギアを封印しようや。早く帰りてぇからな」

フェイト
「あ！！待ってよ銀時！！」

銀時達もなのはの後に続いて研究所に入っていた。

なのはＳｌＤＥ

なのは
「此処が室長室だよね……」

先に研究所に入ったなのははこの研究所の資料があると思われる室長室に来ていた。

なのは
（やっぱりこの研究所のデータがほとんど消されている……）

室長室に入ったなのはは机に置いてあるパソコンを調べてみたが、既にこの研究所のデータは何者かによって消されていた。

なのは
（このパソコンのハードディスクのデータが消されたとしても私の『レインジングハート』なら消されたデータを復元させる事ができるかもしれない）

ポケットの中から小さい赤い玉を取り出したなのはその玉に呼びかける。

なのは
「レンシングハート、このパソコンのデータは復元できる？」

レンシングハート
【はい、任せて下さいマスター。それでは私をパソコンに繋げてくれますか】

なのはパソコンのケーブルをレンジングハートに繋げてデータが復元するのを待った。

なのは
（でも一体誰がこんな場所に研究所を建てたんだろう。此処は管理外世界だから管理局の研究所は無いはず……やっぱり此処は違法研究所なのかな）

などと考えている内にデータの復元が終わったレンジングハードが話し掛ける。

レンシングハート
【マスター、データの復元が終わりましたが、破損が酷く一部のデータしか復元できませんでした】

なのは
「構わないよ。レンジングハート。一部のデータでも構わないから見せてくれる」

レンシングハート
【了解しました】

レンジングハートから映し出されたデータを見たなのはは驚愕の表情を浮かべた。

なのは
「この施設は反管理局組織……『フォルテ』の研究所！？」

反管理局組織『フォルテ』というのは長年、管理局が追っていた犯罪組織で管理局の局員を何人も殺し、管理局の研究所を何個も壊滅させてきた組織の名前に驚きを隠せないがそれよりもこの任務自体が敵によって仕組まれた可能性があると知った方が驚きが勝っていた。

なのは
（本当にこの任務が仕組まれた可能性があるなら……銀さん達が危ない！！）

銀時達に危険が近いづいている事に気付いたなのははレンジングハートをセットアップして白いバリアジャケットを身に纏い銀時達の所に目にも止まらないスピードで向かっていく。

なのは
（フェイトちゃん、銀さん。無事でいて……）

ＳｌＤＥ　ＥＮＤ

フェイト

「あっ！銀時。ロストギアがあったよ！！」

銀時
「うぉッ！本当だ。結構早く見つかったな」

ロストギアがある場所を探す為に一番最初に入った研究室にカプセルに入った状態で普通に置いてあった。

フェイト
「じゃあ、早く封印して銀時とデートしよ♪」

ロストギアを封印する為にパルテッシュを向けながらフェイトは言った。

銀時
「……フェイトちゃん、本当に性格が変わっていない？てゆうか、デートをした事がバレたらシグナム達に殺されちゃうよ」

あまりのフェイトの変わり様にツッコミを入れる銀時だかその時、なのはから念話が入る。

なのは
《フェイトちゃん、銀さん。こちらなのはです。もし無事なら返事して下さい！！》

銀時
「どうしたんだなのは？そんなに慌てて、もしかしてウ〇コが漏れそうなのかい？」

なのは
《この声は……銀さんですか、無事で良かったです》

銀時
「俺の話は無視ですか……まぁ、一応こっちは無事だか、何かあったのか？」

なのは
《実はこの任務は敵の罠の可能性があるんです！！さっきこのデータベースを調べてみたら反管理局組織『キャアアアァァァァァ！！』！？》

悲鳴が聞こえた方向を銀時が振り向くとロストギアから放たれている光に包まれているフェイトの姿があった。

銀時
「フェイトォォォォォォ！！何をやってるんだ！！早く逃げろォォォォォ！！」

フェイト
「ぎ、銀時！！無理だよ！！か、身体が動かないんだ！！」

銀時
「クソォォォォォォォ！！」

銀時は動けないフェイトの所に向かい、体当たりで助け出したと同時になのはが研究室に飛び込んでくる。

なのは
「銀さん！！」

銀時
「なのは！！フェイトを連れて此処から早く逃げろ！！」

フェイト
「いやだ！！銀時を置いて逃げられないよ！！」

フェイトは銀時を置いて逃げる事は出来なかった。
大切な人を失う気持ちを味わいたくなかったからだ。

銀時
「……大丈夫だ。フェイト。俺は死なねぇからよ」

フェイト
「ぎ、銀時……」

ロストギアの光に包まれながら銀時はフェイトに言った。

なのは
「銀さん……分かりました。絶対に死ないで下さいね」

フェイト
「えっ、い、いや……銀時ぃぃぃぃぃ！！」

銀時の言葉を信じたなのははフェイトを抱えながら逃げ出した。

なのは
「レンジングハート！！カードリッジ！！」

カードリッジを四本使い、収束魔法の準備をする。

なのは
「スターライトブレイカー！！」

レイジングハートから放たれた桜色の砲撃魔法はそのまま研究所の天井にぶつかり、巨大な穴が空いた。
その出来た穴からなのは達は脱出した。

銀時
（あの二人は無事に脱出できたみたいだな……）

脱出したなのは達を見届けると銀時も脱出する為に準備をするが、

銀時
（だ、駄目だ……身体が動かねぇ……）

身体が全く動かない。その間にもロストギアから放たれている光が更に強くなる。

銀時
（や、約束したんだよ。絶対に俺は死なねぇってよ。その約束を……破る……わ……け……には……いかねぇ……だ……）

ロストギアの光に包まれていく銀時は意識を失う。
そして同時に研究所も光に包まれて消滅していた。

光が収まり、研究所があった場所になのは達は降り立つが銀時の姿は何処にも無かった。

フェイト
「銀時……隠れているんでしょ。出てきてよ……」

フェイトはフラフラになりながらも必死で銀時の姿を探すか何処にも居なかった。
銀時が居た場所には彼の愛刀『洞爺湖』が落ちていた。

フェイト「嘘つき……絶対に死なないって言ったくせに……」

木刀を胸に抱きながらフェイトの瞳からは大粒の涙が零れ落ちる

フェイト
「う、うあああああああああああああッッッ！！！！」

フェイトの叫び声は虚しく、空に消えていった。

第二訓　簡単な任務ほど罠の可能性がある（後書き）

桜「先ほど書き途中で投稿してしまい本当にすいませんでした。次からはこんな事が無いように努力します。それでは話は変わりますけど、次回からは教えて銀八先生の質問コーナーをやろうと思います。もし良かったら質問を下さい」

銀時「おいコラ作者、感想もあんまり来てないうえ、この小説は最近投稿したばかりって言うのによ、質問が来るわけがないだろ」

フェイト「ハハハ……でも、この小説を読んだ人達が少しでも感想を送ってたら嬉しいかな」

銀時「それじゃあ次回予告をするぞ」

桜「次回『死んだと思ったら実は生きている場合が多い』でテイクオフ！！」

第三訓　死んだと思っても実は生きている場合が多い（前書き）

クロスオーバーする作品を一部変えました。
詳しい事は活動報告で話します。

今回の話は短いです。

第三訓　死んだと思っても実は生きている場合が多い

銀時
（俺……生きているのか？）

意識を取り戻した銀時は白い天井を見上げながらそう思った。

銀時
（生きているって事は俺は助かったのか、それならフェイトとなのはは何処にいるんだ？）

銀時はフェイト達を探そうと身体を動かそうとするが上手く動かせない。

銀時
（あれ？……なんで身体が動かねぇんだ？それところが声もでねぇぞ？）

声も出ない身体が上手く動かせない事に焦りを覚えた銀時は自分が置かれた状況を調べる為に辺りを見渡すが、

銀時
（……何、この小さな手？）

目に飛び込んできたのは銀時の物だと思われる小さな手だった。

銀時
（何！！この小さな足！！何！！この小さな身体！！一体何が起こったんだ！！）

汗を大量に流しながらそう思っていると、突然、女性の顔が飛び込んできた。

銀時
（うおッ！！なんだ！？このデカい女は！？）

？？？

「アナタ！！見て！！鈴の目が開いたわ！！」

その女性は銀時の事を抱き上げながらそんな事を言った。

銀時
（鈴？何を言ってるのこの人は？俺の名前は坂田銀時だよ？一体誰と間違って……えっ？）

偶然鏡に写った自分の姿を見て銀時は言葉を失っていた。
鏡に写っていた姿はいつもの銀髪の天然パーマじゃなく、着物を着ていなかった。
……そこには大人の男性じゃなく赤ん坊が写っていた。

銀時
（な、何これぇぇぇぇぇぇぇぇ！！何で赤ん坊になってるのォォォォォォォォ！？）

？？？
「ほんとだ、目が開いたね。しかし君に似て可愛い女の子だね」

この赤ん坊（銀時）？の父親らしい男性がそう言った。

（な、何ぃぃぃぃぃぃ！！俺、女になっちゃったの！？まだアナログスティックはまだ一回も使ってねぇのに！！）

この日の何度目かの銀時の絶叫が心の中に絶叫が響く。

銀時
（クソッ！！何でこんな事になったんだ！？原因は一体何だ！？……まさか原因はあれが！！）

銀時はこうなった原因は一つしか思い浮かばなかった。

銀時
（あのロストギアの光のせいなのか！！俺がこんな姿になったのは！！）

あのロストギアの光に巻き込まれたせいでこんな姿になったならもう二度と元の姿に戻れるとは思えなかった。

銀時
（俺…女の生活はやっていけるんだろうか……）

銀時はこれから始まる女性としての生活に頭を悩ますのであった。

第三訓　死んだと思っても実は生きている場合が多い（後書き）

桜「更新が遅れてしまってすいませんでした」

銀時「何で更新が遅れたんだ？」

桜「実は今週は色々用事があったんです。しかもストックの関係で来週も更新が遅れる可能性があります」

銀時「おいおいそんなんで最後まで書けるのか？」

桜「必ず書き上げて見せます」

銀時「まぁ、ちゃんと書き上げるのなら良いけどよ」

桜「話は変わりますけど、次のバガテスト編はフェイト達はあんまり出ません。予定では転生した銀時とバカテストのキャラクター中心で書くのでフェイト達の出番はバカテストの回答者だけです」

銀時「おい作者！！そんな事をしたらフェイト達に殺されるぞ！！」

桜「大丈夫です。後半にはちゃんと出番があるから殺される事は無いでしょう……多分」

銀時「最後の一言が物凄い不吉なんですけど…」

桜「それでは次回予告です」

銀時「無視かよ！？」

桜「次回「『バカテスト編』喧嘩するほど仲がいい」でテイクオフ！！」

銀時「皆さん！！恵まれない作者に感想を送ってやれ。このバカ作者は喜ぶぞ」

桜「余計な事を言うな！！」

第四訓　喧嘩するほど仲が良い（前書き）

桜「リリカル銀魂のクロスオーバーする作品の一部をまた変えます。変える作品は緋弾のアリアからリトルバスターズです。迷惑を掛けてすいませんでした」

第四訓　喧嘩するほど仲が良い

バカテスト

世界史

以下の問いに答えなさい。

『西暦１４９２年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞樹の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですか、意外とファーストネームはが知られていないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたか、姫路さんには関係なかったようですね。よくできました。

島田美波の答え

『ブス』

教師のコメント

過去の偉人になんてことを

棗鈴（坂田銀時の答え）

『ハゲ』

教師のコメント

過去の偉人を罵倒しないで下さい。

八神ヴィーターの答え

『クズ』

教師のコメント

何故この学校の生徒ではない人の答案があるんでしょうか

１６年後

此処は文月学園。世界初の『試験召喚システム』を取り入れた試験校だ。
そんな中、学校の廊下を全力疾走をしている女子生徒を含めた三人の生徒が男性教師に追いかけられていた。

???

「コラァ！！貴様らぁ！！止まらんかぁッ！！」

そう叫びながら三人の生徒を追いかけている教師の名前は西村宗一。
趣味がトライアスロンである為、生徒からは鉄人と呼ばれている。

???

「おい！！明久！！お前があんなタイミングでクシャミをしたせいで鉄人に脱走がバレたんだ！！」

???

「いいや！！雄二が鉄人の授業から逃げようと言うからこうなったんだぞ！！お前が責任を取れ！！」

お互いに罵倒しながら逃げているのはこの文月学園の問題児、坂本雄二と吉井明久だ。

???

「うるせぇォッ！！お前らは俺が助かる為に二人揃って囮になりやがれ！！」

そんな二人を怒鳴りつけるのは腰まで長い茶髪をポニーテールに結った、美少女、棗鈴だ。
ちなみにこの棗鈴は『リリカルなのは』の世界からロストギアの影響でこの世界に転生した坂田銀時である。

明久
「何を！！僕がクシャミをしたのは鈴の髪が鼻をくすぐったからだぞ！！此処はひとまず鈴が囮になって鉄人の補習を受けろ！！」

雄二
「そうだ！！お前が囮にりやがれ！！」

鈴
「テ、テメェら……」

メンチを切り合いながらも全力疾走のスピードを全く落とさない。

鈴
「って、喧嘩をしている場合じゃねぇぞ。此処は力を合わせて逃げるしかねぇな」

銀時（地の分では銀時と表記しておく）は明久達にそう提案する。

明久
「うん、そうだね」

雄二
「悔しいが鈴の言うとおりだな。此処は鉄人から逃げ切る為に協力してやるよ」

利害が一致した三人は更にスピードを上げるが鉄人との差は少しも開かない

鈴
「ハァハァハァ……ちくしょう……こっちは限界ギリギリだってのに全然引き離せねぇ。アイツは化け物か」

明久
「トライアスロンをやっている人達ってみんな鉄人みたいなのかな……ところで鈴。一応聞くけど、自分がどういう状況なのか気づいているよね」

鈴
「え、何か？」

雄二
「……やっぱり気づいていないのか……まぁ、その方がアイツらに取っては天国だろうよ」

チラッと雄二は銀時がすれ違いざまに鼻血を噴いて倒れていく男子生徒達に目線を向ける（何故、鼻血を噴いたが内緒だ）
銀時達がしばらく走り続けていると人が一人隠れる事が出来そうな柱を見つける。
その柱を見つけた明久と雄二は顔を見合わせ頷いた。

雄二
「鈴、俺と明久が囮になるからお前は此処に隠れろ」

明久
「そうだよ。鈴は女の子なんだから鉄人は僕達に任せて安全な場所に隠れていて」

鈴
「お前ら……」

銀時は明久達の友情に感謝して柱の後ろに隠れるが――――

明久（雄二）
「「鉄人！！その柱の後ろに鈴が隠れているぞ（よ）！！」」

鈴
「やっぱり俺を囮にして逃げるのかよ！！こんちくしょう！！」

見事に明久達が逃げる為の囮にされた。

柱から飛び出した銀時は階段を駆け下りていく。

……その途中でまた男子生徒が鼻血を噴いた事に気づいていない。

鈴
「くぅぅ……だ、駄目だ。逃げ切れねぇ！！」

鉄人
「観念するんだな棗！！諦めて俺の補習を受けろ！！」

鉄人が数十センチの所まで銀時の背後に来ていた。
そんな絶体絶命な状況の中、一ヶ所だけ窓ガラスが開いている事に気づいた。

鈴
「……鉄人さんよォ、俺は諦めが悪いんだせ。道が無いなら自分で見つけるのか男ってもんよォ」

そのままのスピードを保った状態で開いている窓に足を掛けて外に飛び出した。

鈴
「どおりゃあァァァァァァァ！！」

鉄人
「お、おい！！此処は二階だぞ！！」

鉄人の制止を無視して二階の窓から飛び出した銀時は地面に上手く着地をして何も無かったように再び走り出した。

鈴
「ダッハハハ！！じゃあな鉄人さんよォ！！」

鉄人
「おのれ、覚えておけよ棗。必ず捕まえてやるからな！！」
そんな鉄人の言葉を無視しながら銀時はその場を去った。

体育倉庫

明久
「やぁ、奇遇だね」
雄二
「よくあの鉄人に捕まらなかったな」
鈴
「……何で俺が隠れようとした場所にお前達が居るんだ？」
何処かに身を潜めようと考えた銀時は体育倉庫に入ったら明久と雄二が身を小さくして隠れていた。
鈴
「ちょうどいい……俺を見捨てた借りを此処で返してやるよ……」

雄二
「おもしれぇ。返り討ちにしてやる」

手の骨をゴキバキと鳴らしながら明久達は睨み合う。

三人
『『『くたばれッッッ！！！！！』』』

と三人は一斉に飛び掛る。

鈴
「オラァッ！！」

銀時は回し蹴りを雄二に繰り出すか、受け止められてしまう。

雄二
「今度はこっちの番だせ鈴！！」

受け止めた銀時の足を持ったまま飛び箱の方向に投げ飛ばす。

鈴
「グハァッ！！」

雄二
「どうした口ほどにも『隙あり！！』グホォッ！！」

明久に殴り飛ばされた雄二はボールが入ったカゴに激突して大きな音を立てる。

雄二
「あ、明久……テメェ……」

明久
「隙だらけなんだよ雄二。戦いで隙を見せたら『お前も隙だらけだせ！！』グェッ！！」

今度は銀時の飛び蹴りを喰らった明久は吹き飛んで陸上部が使っている用具にぶつかり大きな音を立てる。

明久
「ひ、卑怯だよ鈴！！隙を突いてくるなんて！！」

雄二
「お前が言うか」

鈴
「最初に隙を見せれば終わりだと言ったのは何処の誰だ」

明久

「クッ……ああ言えばこう言う奴らめ、こうなったら僕の本気を見せてやる！！」

鈴（雄二）
『『それはこっちのセリフだッ！！』』

再び殴り合いの喧嘩を再開しようと三人の背後から野太い声が聞こえる。

鉄人
「ほぅ……また貴様らは問題を起こすのか。良い度胸をしている」

三人
『『『えっ？』』』

物凄い聞き覚えがある声に銀時達はおそるおそる後ろを振り向くと仁王立ちで凄い形相をした鉄人が居た。

三人
『『『て、鉄人！！』』』

鉄人
「俺の授業を脱走した罰とまた問題を起こそうとした罰、補習室でたっぷりと可愛がってやる」

雄二
「ま、待て！！鉄人！！最初に仕掛けてきたのは鈴と明久だ。俺は

止めろって言っているのにコイツらが無理矢理」

明久
「き、汚いぞ！！雄二！！此処で暴れた罪を僕達に擦り付ける気か！！」

鈴
「そ、そうだ！！俺はただ巻き込まれただけんだよ！！だから明久達を補習室に連行して俺を見逃してくれ！！」

自分が助かる為に他人を犠牲にしようとしている明久達の行動に鉄人がボソッと呟いた。

鉄人
「……安心しろ。お前達」

明久
「分かってくれましたか鉄人」

雄二
「明久と鈴をきっちり叱ってくれ」

鈴
「じゃあ、鉄人。明久と雄二を宜しく頼むぜ」

銀時達はそう言って体育倉庫の出口に向かっていくが、

鉄人
「俺は差別をしない主義なんだ」

三人
『『『……えっ？』』』

鉄人
「お前達、三人を平等に可愛がってやる！！」

三人
『『『フンギャァァァァァアアア！！！！』』』

鉄人の拳を身体に叩き込まれた銀時達の悲鳴が体育倉庫に響いたのであった。

銀八「教えて」

全員「銀八先生」

明久「銀八先生のアシスタントは文月学園の生徒、吉井明久がやります」

銀八「今回が初めての銀八先生をやる事になった。吉井、お前みたいな馬鹿が最初のアシスタントに選べれた事に感謝しろよ」

明久「先生一言余計です」

※ちなみに銀八先生と銀時は違う人物なので女になっていない

銀八「そんじゃ、ペンネーム『黒龍』さんからの質問だ」

明久「『銀さんが性転換をして女になってしまうそうですけど、女になった銀さんはやっぱりフラグメーカーなんですか？つまり百合の』ってどういう意味の質問なの？」

明久は銀さんが鈴だという事に気づいていない

銀八「お前が気にする必要はねぇよ。それで質問の答えだか基本的にバカテストのメインキャラで百合の予定は無いらしいぞ。まぁ、アイツに惚れているフェイト達と百合は軽くあるみだいだな」

明久「？？？よく分からないけど、二つ目の質問に行くよ。『女に

なった銀さんの性格は変わるんですか？』また訳が分からない質問だよ」

銀八「本編を読んでくれたら分かると思うが、銀時が女になっても性格はあんまり変わらないな」

明久「じゃあ次の質問は……」

銀八「今回の質問はこれで終わりだぞ」

明久「ええっ！！質問はもうないの！？せ、せっかくの僕の見せ場なのに……」

ｏｒｚこの格好で項垂れる明久。

銀八「次の銀八先生はいつになるかは分からねぇが一応アシスタントを紹介しとくぞ。次回のアシスタントは明久と銀時の悪友の坂本雄二だ」

第四訓　喧嘩するほど仲が良い（後書き）

桜「次回は「友達を見捨てたら自分自身にも償いがある」でテイクオフ！！」

誤字脱字があったら教えてください。感想を待っています

棗鈴（坂田銀時）のプロフィール　改正版（前書き）

桜「今回はキャラ紹介だけです」

棗鈴（坂田銀時）のプロフィール　改正版

棗鈴（坂田銀時）

容姿：茶髪の長い髪をポニーテールに結っていて瞳はちょっと赤っぽい色をしている。
イメージで言えば本家の『リトルバスターズ』の棗鈴と全く同じ

性格：女に転生しても性格はあんまり男の時と変わっていない。
よく明久達と馬鹿な事をやっているせいで教師達から目を付けられている。
ちなみに明久と同じ『観察処分者』である（でも本編ではあんまり銀時の召喚獣は出てこない）

悩み：身体つきが女らしくなってきて涙もろくなったこと。
両親（特に母親）が銀時に可愛い服を着せたり、髪を切らしてくれない（髪を切ったら小遣いを減らされる）。その反動なのか高校に入学して一人暮らしている時は男の格好をしている。

身長１５３ｃｍ

体重４３キロ

３サイズ

Ｂ７７

ｗ５４

S80

運動能力：これも男の時と変わっていないので本気になれば明久や雄二、鉄人より戦闘力は高い

デバイス：???

棗鈴（坂田銀時）のプロフィール　改正版（後書き）

桜「これが銀さんのプロフィールですね」

銀時「……」

桜「あれ？どうしたんですか銀さん」

銀時「いや……本編だけじゃなくプロフィールまであると本当に俺は女になったんだなと思ってよ…」

どこが遠い目をしながら銀時は言った。

桜「銀さん。人生は諦めか肝心ですよ」

銀時「テメェが俺をこんな目に合わせたんだろうか・・・」

作者に凄まじい殺気をぶつけながら木刀を手に取る

桜「ぶっちゃけて銀さんの戯言より自分の悩みのほうが大切ですよ」

銀時を女性化させた事に全く悪びれる様子を全く見せない作者だった。

桜「あんまり感想が来ないんですよね。おまけに質問も殆ど来ないから銀八先生は不定期になるし…一体何が原因なんだろう？」

銀時「それは自業自得じゃねぇのか。お前がキャラを変え過ぎたせいで読者が訳か分からなくなったんだろう」

桜「やっぱり銀さんもそう思うんだね…」

このバカ作者（桜）は本編の二話だけで二回もキャラを変えている

銀時「本当にまたキャラを変えたりしたら本当に読者が離れても俺は知らないからな」

桜「分かっています……もうこれ以上はキャラを変えたりしません。命を懸けます！！」

銀時「……イマイチ信用ができねぇ」

桜「本当です！！本当にこれ以上、キャラを変えないので信じて下さい！！（土下座）」

銀時「ハァ～……読者の皆さん。このバカにもう一度チャンスを上げてくれ」

桜「とういうわけで次からは本編に戻りますので待っていて下さい」

第五訓　友達を見捨てたら自分自身にも償いがある（前書き）

更新します

第五訓　友達を見捨てたら自分自身にも償いがある

バカテスト　地理

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞樹の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君の国の定義が気になります。

棗鈴（坂田銀時）の答え

『友情、努力、勝利』

教師のコメント

それはジャンプの三大原則です。

フェイト・テスタロッサの答え

『ミットチルダ、時空管理局。鳴海町』

教師のコメント

どうしてまた学校の生徒じゃない人の答案があるんでしょうか。しかも間違いです。

鈴

「イテテ……あの野郎、本気で殴りやがって手加減を知らないのか」

銀時は鉄人に殴られて腫れた頬をさすりながら言った。

???

「それはお主達の自業自得じゃ。鉄人の授業から逃げたうえ、喧嘩までやったのだから仕方かないじゃろう」

と、言うのは銀時と同じクラスの木下秀吉。
見た目はどう見ても美少女だか、正真正銘の男だ。
しかし他のクラスメイトや同じ学年の生徒からは第三の性別『秀吉』と認識されていたり女扱いをされている。

明久
「うう……冷たいよ秀吉」

???

「あの……明久君、良かったらこれで冷やしで下さい」

明久
「ありがとう姫路さん」

水で濡らしたハンカチを差し出すのは秀吉同様、銀時と同じクラスメイトの姫路瑞樹。
プロモーションは抜群で薄いピンク色のロングヘアーが特徴的な美少女だ。

？？？

「本当にアンタ達は懲りないわね。一体何回同じ事を繰り返せば気が済むのよ」

呆れ顔で言うのは短めのポニーテールでスレンダーな少女、島田美波。

よく明久（自業自得）が美波のコンプレックスをからかっては折檻（比喩表現）をする困った女の子だ。

鈴

「だってよォ。あんな筋肉ゴリラの授業なんて受ける気がしねぇよ。毎日が地獄の補習と同じだ」

銀時は自分が使っているダンボール（一応これがＦクラスの机）に両足を乗せる。

ちなみに銀時はスカートなのでダンボールに両足を乗せると奥から白い布が見えている。

美波

「ちょっ、ちょっと鈴！！何をやっているのよ！！」

鈴

「え？何が？」

姫路
「何がって……鈴ちゃんは女の子なんですよ！！無防備過ぎます！！」

鈴
「無防備？何の話だって、ああ…パンツの事な」

姫路（美波）
「「なっ！？」」

銀時の言葉に美波達は言葉を失っていた。

鈴
「何固まっているんだお前ら、パンツを見られたくらいで俺はどうも思わないよ。第一結婚したらパンツよりも凄い事をやるんだよ。男と女が生まれた時の姿で下半身同士が合体するんだからパンツを見られて恥ずかしいと思っていると結婚できないねぇよ」

秀吉
「……とても女の子とは思えない発言じゃな」

Fクラス全員
「……（グッタリ）」

今の銀時の発言でクラスメイト全員（秀吉と雄二を除く）が鼻血の海に沈み、美波と姫路に至っては顔を真っ赤にして震えていた。

～しばらくお持ち下さい～

明久
「そういえばもうすぐ『学力強化合宿』だよね。何処でやるんだろう？」

血の海から復活した明久はそんな事を言った。

雄二
「詳しい事は分からないか卯月高原という避暑地でやるらしいぞ。まぁ、合宿の話はこの後にやるホームームで鉄人から説明をされるだろうって――――――ムッツリーニ何をやっている？」

ムッツリーニと呼ばれた下を向いて一心不乱にカメラを弄っていた。

ムッツリーニ
「……さっき撮った鈴の写真を整理しているわけではない」

明久
「……だれもそんな事は聞いていないよムッツリーニ」

隠し事を出来ないムッツリーニであった。
ちなみにムッツリーニの本名は土屋康太。男子生徒から畏怖と畏敬を女子生徒からは軽蔑の眼差しを（銀時は気にしていない）を受ける性職者だ。

鈴
「ムッツリーニ……」

ムッツリーニ
「……鈴」

銀時とムッツリーニは睨み合いそして

ムッツリーニ
「……（スッ）」

……ムッツリーニは銀時に茶色の封筒を渡した。

鈴
「毎度あり♪」

美波
「ちょっとォォォォォォ！！何をやっているのよォォォォォォォ！！」

さっきの大胆発言？から復活した美波は叫ぶ。

鈴
「んだよ……さっきまでボーッとしてたくせに、復活した途端に騒ぐんですかコノヤロー」

美波
「さ、騒ぎたくなるのは当たり前でしょ！！どうして土屋が勝手に撮った写真を許しているのよ！！しかもお金を貰っているし！！」

顔を真っ赤にしながら美波は言うが、逆に銀時は涼しい顔で封筒に入ったお金を数えていた。

美波
「ちょっと！！人の話はちゃんと聞いているの！！」

鈴
「はいはいちゃんと聞いてますよ。仕方かないだろ何故か金が無くって今月の生活が厳しいから少しでも金がいるんだよ」

と、言いながら銀時の右手はクルクルと回っていた。

美波
「その手の動きは何！？パチンコ！？パチンコに行っているの！？高校生のくせに！？てゆうか、それで生活費がなくなるのは自業自得じゃないの！！」

鈴
「いやぁ～、こっちも良い商売なんだよ。俺のスカートの中を撮ったら五千円、普通の写真なら二千五百円くらいで許可したら結構金が入ってくるから儲かるわけよ♪」

美波
「アンタは本当に女の子なのォォォォォォォ！！」

鈴

「お、中々のツッコミじゃねぇか、このまま行けば良いツッコミ役になれうぞ。目指せ第二の新八君」

美波
「新八って誰よォォォォォォォ！！」

鈴
「ノギャァァァァァァ！！」

美波の渾身の飛び蹴りを喰らい吹き飛んだ銀時はロッカーに激突して大きな音を立てた。

明久
「・・・・・・・・・・・・やっぱり学力強化合宿って勉強ばかりするのかな」

吹き飛ばされた銀時を横目で明久は見つつ話を続ける。

雄二
「それは当たり前だろ。仮にも学力強化合宿だぞ、少しでも学力を上げるのか目的だ。お前は何をすると思っているんだ」

明久
「ハァ～・・・やっぱりそうだよね」

鈴
「そうなのか。せっかくお土産を買おうと思っていたのによォ、明久もそう思うよな」

美波の飛び蹴りから復活した銀時は明久の肩に腕を置きながら言った。

明久
「り、鈴・・・・・・近づき過ぎるよ。し、しかも当たっているし」

鈴
「んっ？」

今の銀時は明久の肩に腕を回している為、上半身が密着していて・・・・・

鈴
「何？ひょっとして胸が当たっているから興奮しているのか」

明久
「！！・・・・・そ、そんなわけがないだろ！！僕は平常心の塊だ！！」

鈴
「ほぅ、それなら試してやるよ・・・・・ほれほれ（ムニュムニュ）」

明久
「（ドハァッ！！）ひ、卑怯な・・・・・・・！！」

鈴
「何処が平常心の塊なんだ。思い切り・・・・・・」

そこで銀時の言葉は途切れた。
何故なら一瞬で目潰しを喰らい床に倒されているからだ。

鈴
（ダァァァァァッッッ！！目が、目がイテぇぇぇぇぇぇッッッ何！？俺の目に一体何があったの！？）

痛みで床に転がりながらも今、自分の身に起きた事を確認する為に目を開けて霞む視界の中で辺りを確認する。

ＦＦ団団長
『これより吉井明久の異端審問会を始める』

ＦＦ団その一
『判決は死刑！！』

明久
「開始数秒で死刑判決！？ちょっと弁護をさせてよ！！」

……明久は張り付けにされて覆面の男達に処刑されようとしていた。

ＦＦ団団長
『黙れ。異教徒が、何人たりとも許されない女子の聖地を触るなど許されるわけがない。被告人には弁護の余地はない死刑！！』

明久
「ま、待て！！あれは鈴が自分から……」

ＦＦ団団長
『処刑方法は火あぶりだ！！』

ＦＦ団全員
『異議なし！！』

明久

「助けてぇ――――――――――――！！」

鈴
「あーあ、明久の奴は処刑されたか……まぁ、さっき俺を見捨てた罰だな。じっくりと反省しやがれ」

火あぶりにされている明久に銀時はそんな事を呟くが、

姫路
「鈴ちゃん」

美波
「まさか自分は関係ないと思っているわけではないわよね」

もの凄い殺気を放っている姫路と美波の姿があった。

鈴
「ひ、姫路さん？み、美波さん？」
姫路
「鈴ちゃんは本当に駄目ですね。明久君を惑わすなんて……」
美波
「ウチら、アキの純情を守ろう会を作って良かったわ」

と、言いながら美波と姫路は銀時の手足を縄で縛っていく。

鈴
「ハハハハ……ふ、二人とも、銀さんの手足を縛ってどするのかなぁ？」
姫路
「フフフフ、心配しないで良いですよ。鈴ちゃんにはちょっとバンジージャンプをしてもらうだけですから」
美波
「そうよ、バンジージャンプをしてもらうだけよ。……紐なしのね」
鈴
「そ、それはバンジージャンプとは言わねぇよ！！処刑だ！！」

そんなツッコミを無視して姫路達は縛られた銀時を引き摺りながら屋上に向かっていく。

鈴
「ふ、二人とも、冗談でしょ。今の内に止めてくれたら２００円あげるから！！」

姫路（美波）
『……』

鈴
「ちょっと！！無言は止めてよォ！！何かマジぽいじゃん！！」

姫路（美波）
『……』

鈴
「なんでまた無視するの！？だ、誰か助けてくれぇ――――――――！！」

銀時はそんな悲鳴を上げるか誰も助けてはくれない。
そんな状況を見て秀吉は思った友達を見捨てたら自分自身にも償いがあると……

銀八「三年Ｂ組」

みんな「銀八先生！！」

銀八「さぁて、今回のアシスタントは文月学園二年Ｆ組の代表である明久の悪友、坂本雄二だ」

雄二「よろしくな」

銀八「さっそく『ルシフェル』さんからの質問だ。『実際鈴（銀さん）と実付き合ってみてどう思う？容姿とか性格とか』それじゃあ明久達はどう思うか答えてくれ」

明久「うん、鈴は結構可愛いと思うよ。付き合ってて飽きないし楽しいよ」

秀吉「鈴は結構ワシのタイプで可愛いのじゃ、そして雄二以外で唯一ワシを男扱いしてくれる友人なのじゃから大切にしていのじゃ」

ムッツリーニ「……鈴は学年で霧島翔子に続いてナンバー2の人気がある。そのおかげで写真も高値で売れている」

雄二「……（婚約者の翔子に拉致をされたので回答不能）」

美波「うん。鈴は可愛いし、男子にも人気があるから少し嫉妬しちゃうかな。でも、不思議とウチ達は鈴に惹きつけられていくのよね」

姫路「私も美波ちゃんと同じ意見です。そして鈴ちゃんは明久君達とあんなに仲が良いのが羨ましいです。鈴ちゃんも女の子なのに私達とは違う感じがするから性別を超えた付き合いが出来るかもしれませんね」

銀八「二つ変な答えがあったが気にしないで二つ目の質問に行くぞ。『鈴（銀さん）に言葉使いや行動を直してほしくない？』よし、また宜しく頼むぜ」

明久「うーん、言葉使いよりもう少し恥じらいを持ってほしいかな。僕達の目の前で普通に着替えたり変な座り方のせいでスカートの中が見えたりするから目のやり場に困るんだよね」

秀吉「ワシは言葉使いや行動も直して欲しいのじゃ、あんなに可愛いのに勿体無いのじゃ！！」

ミッツリーニ「……今のままでいい。鈴の無防備さのおかげで写真の売り上げが良いから無防備さが直ると困る」

雄二「……（同じく婚約者の翔子さんに拉致をされて回答不能）」

姫路、美波「ぜひ直して欲しいわよ（です）！！鈴（ちゃん）の無防備さのおかげでアキ（明久君）が惑わされてのが困るわ（困ります）！！」

銀八「今回も二つほど変なのかあったが気にしないでくれ。それから明久達は銀時の無防備さを直してもらいたいと思っているらしい。んじゃ、三つ目の質問だ「銀さん本人に質問です。女の子になって良かったですか（黒笑）」さっそく銀時本人に答えてもらおう」

鈴「ふざけんな！！女になって良い事なんてあるか！！お、俺のアナログスティックを返せぇ！！」

銀時は木刀を振り回して暴れていた。

銀八「ちなみに雄二が鈴と浮気したと分かった途端に翔子に処刑されるぞ。質問者の『ルシフェル』さん廊下に立っていなさい」

雄二「ハァハァ……次は『黒龍』さんの質問だ」

銀八「お、戻ってきたのか」

そこには制服がボロボロになっている雄二の姿があった。

雄二「こっちは死に物狂いで翔子から逃げて逃げてきたんだよ！！」

銀八「はいはい分かりました。それじゃあ最初の質問だ。『鈴（銀さん）はやっぱり美少女ですから、男子から告白やラブレターを貰ったりするんですか』これも銀時本人に答えてもらおう」

鈴「かなりモテるぞ。なのは達の世界に居た時と同じくらいな……男にモテても嬉しくないかな」

少し遠い表情をしながら銀時は言った。

銀八「……少しお前に同情するぞ、気を取り直して二つ目の質問に行くぞ。『明久に質問、棗鈴さんに優しくしないんですか』今度は明久本人に質問みたいだな宜しく頼むぞ」

明久「もちろん鈴は女の子だから優しくするよ。でも、鈴は馬鹿な事をする良い仲間だから扱いが乱暴になるだけだよ」

銀八「だ、そうだ。明久はちゃんと優しくする事もあるらしいぞ、次で最後の質問だ。『鈴（銀さん）は貧乳とか言われたら怒こりますか？ちなみに今の身体的特徴で何言われたら怒こりますか？』最後だからしっかり頼むぞ銀時」

鈴「また俺への質問か、そんなに女になったのが珍しいのかね……質問の答えだか身体的特徴や別に貧乳とか言われても怒こらないぞ。心は男だからな」

銀八「質問者さんの『黒龍』さん。廊下に立っていなさい」

雄二「結局、今回は何もしなかったな。俺がアシスタントなのにな」

銀八「お前が霧島に捕まっているせいでこうなったんだ、諦めろ。お、霧島が物凄い勢いでこっちに向かっているぞ」

雄二「な、何ッ！！」

長い黒髪の少女がこっち凄い勢いで向かってきていた。

雄二「ちくしょう！！銀八！！後は頼んだぞ！！」

銀八「おい、待てよ！！……結局、俺が最後までやるのか。んじゃ、次回は『世の中は格差社会である』でテイクオフ！！」

第五訓　友達を見捨てたら自分自身にも償いがある（後書き）

ヤバい駄文だ…

誰がもっと小説が上手く書ける方法を教えてください。

話は変わりますけど、皆さんに質問があります。

やっぱり銀さんの武器は刀の方が良いですか？

第六訓　世の中は格差社会である。（前書き）

桜「ちょっと皆さんにお知らせがあります。いつも本編のおまけとしてやっている『教えて銀八先生』を本編と分けてやることにしました。理由は本編を書きながら銀八先生をやるのは作者の体力的にもちょっと難しかったので分けてやる事に決めました。質問をくれた皆さんに迷惑を掛けてすいませんでした。ですか、ちゃんと質問は答える予定なので宜しくお願いします」

第六訓　世の中は格差社会である。

バカテスト　物理

問、以下の文章の（）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（）である』

姫路瑞樹の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せて返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もＲＰＧは好きです。

棗鈴（坂田銀時）の答え

『人は誰だって光になれるんだ！！』

教師のコメント

先生も平成ウルトラマンは好きですよ。

八神はやての答え

『収束魔法』

教師のコメント

もう部外者の答案がある事をツッコミませんよ……

鈴
「し、死ぬかと思った……」

明久
「同じく……」

姫路達のお仕置きから復活した銀時と明久は（ＦＦＦ団の処刑から）は生きている嬉しさを噛み締めていた。

明久
「あ、鉄人に追われていたり須川君達に処刑されていたから、鈴に相談したい事があるのをすっかり忘れてた」

鈴

「俺に相談したいこと？」

明久
「うん」

と、言いながら明久は痛む身体の中、座布団に座る。

鈴
「ふーん、それで俺に相談したい事ってなんだ？」

明久
「うん、実は……僕のメイド服パンチラ写真が全世界に配信されそうなんだ」

鈴
「……なんの話だ」

明久
「ごめん端折り過ぎた。実は――――――」

明久がいうのは今朝下駄箱に脅迫状（メイド服パンチラ激写写真が同封されていた）が入っていて、これ以上異性に近付くなと脅されたらしい。

鈴
「明久の話から察するに脅迫者は明久と親しい異性に特別な思いを抱いている奴だと予測できるな」

全ての話を聞き終わった銀時はそんな事を言った。

明久
「親しい異性……そうなるとこのクラスでたった三人の異性。姫路さんと秀吉。鈴に好意を持った人になるよね」

秀吉
「明久。銀属バットを取りに行った島田が帰ってくる前に逃げるのじゃ」

明久
「えっ、僕の推理は間違っていた?」

鈴
「思い切り間違ってるな。後、俺を女扱いするなって言っているだろ、それに秀吉は男だ」

秀吉
「……わしの性別を正しく理解してくれているのはお主と雄二だけじゃ」

何故が秀吉は銀時の言葉に感激をしていた。

ムッツリーニ
「……それで俺に脅迫犯を探してほしいって事だな」

脅迫犯の情報を少しでも掴む為に明久は盗撮や盗聴に詳しいムッツリーニに相談する事にした。

明久
「うん、もし脅迫犯を特定してくれたら秘蔵コレクションその2を持ってくる」

ムッツリーニ
「……ついでに鈴の際どい写真を撮らせてくれたら嬉しい」

明久
「クッ、仕方ない。僕の社会的地位が終わるよりはマシだ。許可しよう」

鈴
「テ、テメェ!!勝手に人を売るんじゃねぇよ!!」

ムッツリーニ
「……取引完了　（ダバダバ）」

鈴
「お前も勝手に承諾するな！！」

明久と土屋の取引材料にされた事に銀時は泣きながらツッコミを入れる。

雄二
「ムッツリーニ、次は俺の依頼を頼む」

いつの間にか後ろに居た雄二は騒ぐ銀時を押しのけて前に出てきた。

ムッツリーニ
「……雄二も誰から脅迫を受けているのか？」

雄二も明久同様に誰がから脅迫されていたのかムッツリーニに捜査を依頼する。

雄二
「ああ……まずはこれを聞いてくれ」

ポケットからＭＰ３を取り出してスイッチを入れると、雄二？の声が流れてきた。

雄二？
「ピッ、翔子。俺の口でちゃんとプロポーズをしたい。愛している翔子」

鈴（明久）
（（ゲッ！！））

雄二
「……機械オンチであるはずの翔子が何故か捏造された俺のプロポーズが入ったＭＰ３プレイヤーを持っていたんだ……」

鈴（明久）
「「……」」

その偽プロポーズは明久と銀時が仕組んだ事だった（詳しくはまた別のお話）

明久
「で、でも霧島さんは可愛いんじゃないかな」

鈴
「そ、そうだよな。好きな奴からのプロポーズを記念としてとっておきたいなんて可愛いじゃねぇか」

雄二
「いや、婚約の証拠として父親に聞かせるらしい……」

鈴（明久）
「「……」」

銀時達は罪悪感で冷や汗を大量に流す。

雄二
「この再生用のＭＰ３プレイヤーに入っているプロポーズはおそらくコピーだろう。オリジナルを消さなきゃ意味がねぇ」

雄二は早くオリジナルの捏造されたプロポーズを消したいらしい。

雄二
「そんなわけで、そのセリフを録音した犯人を突き止めてもらいたい。翔子は機械オンチだからこんな事を出来るはずかねぇ、きっと盗聴に長けている奴が貰ったに決まっている」

あの時のプロポーズを銀時達は録音をした覚えがない。
おそらく録音機が仕掛けられていた可能性が高いだろう。

ムッツリーニ
「……報酬は？」

雄二
「お前の気に入りそうな本を持ってくる。後、鈴の際どい写真撮影も付けよう」

鈴
「おいいいいいい！！何でまた俺を取引材料に使うのォォォォォォォォォ！！」

ムッツリーニ
「……必ず調べ挙げておく　（ダバダバ）」

鈴
「もういや……何でアイツらは人の事を売るの……」

ｏｒｚこんなポーズを取りながら項垂れる銀時に秀吉（台詞が今まで無かったが最初から銀時と一緒に居た）は慰めの言葉を掛ける。

秀吉
「鈴……生きていればきっとその内に良いことがあるはずじゃ」

鈴
「秀吉……俺の味方はお前だけだ…」

秀吉
「だ、抱きつくのは止めるのじゃ！！む、胸が当たっておるぞ！！」

顔を真っ赤にしながら秀吉は銀時に注意する。

明久
「何を言ってるの秀吉。女の子同士なんだから抱きつかれても問題ないじゃないか」

ムッツリーニ
「……美少女同士の絡み合いは高く売れる」

秀吉
「だからワシは男だと言ってるじゃろ」

鈴
「ハッ、ちょっと女ぼくなってきてる」

雄二
「おい、何か話が変わってきてないか」

教室で明久達が馬鹿騒ぎをしていると教室のドアがガラッと開き、鉄人が入ってきた。

鉄人
「お前達、騒いでいないで早く席に着け」

鉄人の一言で全員が自分の席に着いた（てゆうか、このクラスで鉄人に逆らおうとする奴はいない）

鉄人

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だか、だいだいのことは今配っているしおりで確認しておくように。まぁ旅行に行くわけではないので勉強道具一式を持ってくれば問題はないだろう」

回ってきたしおりを一冊だけ貰い、銀時は残りを明久に回す。

鉄人
「集合の場所と時間を間違えないように」

鉄人のドスが利いた声が響く。
確かに鉄人の言うとおり学力合宿とはいえ、遅れたらシャレにならない。
銀時は念の為にしおりを開いて集合場所と時間を確認する。

鉄人
「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとに違うからな」

鈴
（どうせ、AクラスとBクラスはきっとリムジンバスとかで快適に向かうんだろ）

明久
（そうだね。Ｆクラスは小さなマイクロバスかもしれないね。いや、それどころか引率教師だけの可能性があるよ）

鈴
（確かに……）

しかし鉄人が言った事は銀時達の予想の斜め上を行った。

鉄人
「Ｆクラスは他のクラスと違って現地集合だからな」

Ｆクラス全員
『『『案内すらないのかよ！！』』』

あまりの扱いの差に全級友が涙した。

おまけ

明久「本編の初めにも言ったけど、教えて銀八先生を本編と分けてやることになりました。質問をくれた皆さんすいませんでした。ところで鈴、本編で僕達にムッツリーニと取引材料にされた事に何であんなに嫌がったの？鈴だってムッツリーニに自分の写真を入れてお金を貰っているんでしょ」

鈴「俺の写真をムッツリーニ商会に入れるのは金が入るからだ。金が入らなきゃ誰が写真を撮らせるかよ」

明久「あ……お金が入ればどんな写真を撮られても許すんだね……」

鈴「一部の写真以外はな。んじゃ次回予告をするぞ」

明久「了解！！次回『旅行ではエッチケット袋を忘れずに』でテイフオフ！！」

第六訓　世の中は格差社会である。（後書き）

うう…やっぱり駄文だ……

この文書は変じゃないか物凄く心配です。

近いうちにもう一つコラボする作品をもう一つ増やす予定があります（確定ではありませんが）そこで質問なんですけど、実はコラボを予定している作品を他の作者もリリカル銀魂にコラボさせているんです。内容はもちろん違いますけど、ちゃんとその作者から許可を取った方が良いでしょうか

第七訓　旅行ではエチケット袋を忘れずに（前書き）

更新します

第七訓　旅行ではエチケット袋を忘れずに

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞樹、島田美波、木下秀吉の日誌

『合宿初日から大変な目に遭いました。電車の中で明久(アキ)君達と他のクラスメイト達が（自主規制）をしてしまい、その後始末をしていたら西村先生に叱られてしまいました』

教師のコメント

姫路さん達が合宿所の到着が遅れてしまった事情は分かりました。帰り道に土屋君達にエチケット袋を持たせておきます。

土屋康太の日誌

『電車が走っている途中、突然眩暈のような感覚が襲われてしまった。そのせいで（自主規制）をしてしまったがあれは一体なんだったんだろう』

八神シグナムのコメント

それは乗り物酔いじゃないのか。

教師のコメント

今度はコメントですか……
本当に貴方達は何者なんですか。

吉井明久の日誌

『電車の中でムッツリーニが（自主規制）をやったせいで鈴と僕を含めた他のクラスメイト達まで（自主規制）をしたので姫路さん達に迷惑を掛けてしまいました』

神楽のコメント

分かったのならいいアル。
もしまた同じ事を繰り返したら容赦しねぇぞ

教師のコメント

何でそんなに偉そうなんですか

合宿所である卯月高原に向かう電車に揺られて一時間。

鈴
「……おい、明久。何か面白い事はねぇか」

さずかに暇になったのか銀時は何か面白い事は無いか明久に聞いた。

明久
「……そんな事を僕に言われても……ねぇ雄二は暇を潰せる事はない？」

雄二
「ああ、面白い事ならあるぞ。トイレの鏡でお前達の顔を見てこい」

鈴
「……それは俺達の顔が面白いって事かね。雄二君？」

銀時は額に怒りマークを浮かべながら答える。

雄二
「いや、お前達の顔は意外と――――笑えない」

雄二
「笑えないほど何！？笑えないほど僕達の顔は酷いの！？」

雄二
「違う、俺が面白いと言ったのはお前達の守護霊のことだ」

雄二の守護霊という言葉に銀時の身体がビクッと震えた。

明久
「守護霊？そんな物が見えるの？」

雄二
「ああ、見えるぞ。血みどろで黒髪を振り回している珍しい守護霊が」

更に銀時がビクッと震える。

明久
「そいつはどう考えても僕達を守っていないよね」

雄二
「安心しろ。半分冗談だ」

明久
「あ、なんだ。ビックリした」

雄二
「本当は茶髪だ」

明久
「そこは一番どうでもいいよね――――って、どうしたの鈴？身体が震えているよ」

顔を真っ青にして震えている銀時に明久は心配そうに言った。

鈴
「だ、だだだだだだ大丈夫だよォ！！ぎぎぎぎぎ銀さんは何とも無いから心配しないで良いよォ！！」

明久
「……全然大丈夫そうに見えないんだけど」

秀吉
「そうじゃな、顔色が悪いだけじゃなく冷や汗も掻いているようじゃ」

銀時本人は大丈夫だと言うが今の銀時を誰が見ても大丈夫そうに見えなかった。

雄二
「……ひょっとしてお前」

鈴
「ビクッ！！……何かな？雄二君……」

雄二
「幽霊が……怖いのか？」

雄二の言葉に秀吉達は驚きの声を挙げた。

姫路
「ええっ！！鈴ちゃんはお化けが怖いんですか！？」

美波
「鈴には苦手な物は無いと思っていたわ」

秀吉

「……鈴も意外と女の子ぽい所もあるんじゃな」

うんうんと秀吉達は頷く。

鈴
「だ、誰がそんな物を怖いと言ったァ！！」

必死に幽霊が怖いという事を銀時は否定する。

雄二
「だが、お前は俺の話にビビッていたじゃねぇか」

鈴
「ビビッてねぇよッ！！」

雄二
「そうか……あ、茶髪で血みどろの女が鈴の肩に手を置いているよ」

鈴
「ギ、ギャアアアアァァァァ！！」

驚いた銀時は横に飛ぶ。
……横の席に明久が座っている事を忘れて

明久
「フゴッ！！」

全員
『『『あ……』』』

目の前の光景に雄二達の声が揃う。
何故なら明久の顔が銀時の胸に埋もれたうえ、押し倒しているからだ。

鈴
「あ……悪い明久。大丈夫か？」

明久
「うん……大丈夫だよ鈴……そっちは怪我してない？」

鈴
「ああ……大丈夫だ」

鈴（明久）
『『……』』

銀時と明久の間に妙な空気が流れる。

鈴（明久）
『『……』』

銀時の唇が明久の唇に近づいていく。
キスまで後、五センチ……三センチ……一センチ……。

鈴
「って誰がキスをするがァァァァァァァァァ！！」

そんな事を叫びながら明久から離れる。

鈴
「なんなのこの雰囲気！？なんなのこのシチュエーション！？この小説でいくら俺が女になっても男とキスをするわけねぇだろ！！」

自分の髪を掻き乱した後、空に指を差しながら叫んだ。

鈴
「おいッ！！作者ァッ！！俺がキスをする……」

そこで銀時の言葉が途切れた。
銀時（前にも言ったが今の銀時は一応女）が明久にキス（未遂）をしようとしたせいで鬼？が二人目覚めたからだ。

美波
「……本当に鈴は何度同じ事を繰り返せば分かるのかしら（ゴゴゴゴ）」

姫路
「……鈴ちゃんはどれだけ明久君を惑わせば気が済むんですか（ゴゴゴゴ）」

この殺気は白い魔王でも上回る物だったと後に銀時は語る。

美波
「ねぇ、瑞樹。人が高速で走っている電車から突き落としたらどうなるか見てみたいわよね」

姫路
「そうですね。走っている電車から人を引きずられる姿も見たいですね」

鈴
「いくら何でもそれは死ぬ！？」

姫路（美波）
『『それじゃあ鈴　（ちゃん）逝きましょう（か）』』

鈴
「イヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤヤ！！」

一方その頃の吉井明久は――――

ＦＦＦ団団長
『これより異端審問会を始める』

ＦＦＦ団団員その一
『被告人吉井明久の罪状を読みたまえ』

ＦＦＦ団団員そのニ
『ハッ！！同じクラスメイトである棗鈴（以下この者を貧と呼ぶ）が吉井明久（以下この者を甲と呼ぶ）が貧にキス（未遂）を迫っており、不純異性交遊の現行犯で逮捕しました』

ＦＦＦ団団長
『うむ、本音は？』

ＦＦＦ団団員そのニ
『キスをされようとしていたので羨ましいだけであります』

……清清しいほどの嫉妬だった。

明久
「待ってよみんな！！あれは鈴のイタズラで」

ＦＦＦ団団長
『判決は会員２５名によるバックドロップリレーだ！！』

ＦＦＦ団全員
『『『異議なし！！』』』

明久
「弁明すら聞いてくれない！！」

明久がそう言っている間に須川の腕が腰に回される。

明久
「ハハハハ、僕が君達の暴力に屈すると――――ハガァッ！！ごめんなさい！！許してぇッ！！」

～あまりにも残酷な描写なのでしばらくお持ちください～

美波
「ねぇ、みんなで心理テストでもやらない？」

美波はさきほど駅で買った本を読みながら言った。

雄二
「心理テストか……暇つぶしにちょうどいい。ほら鈴と明久、いつまでも寝ていないで起きろ」

お仕置き（婉曲表現）を受けてうつ伏せ倒れている銀時と明久に乱暴に声を掛ける。

鈴
「……少しは俺達の事を心配してくれ……」

明久
「理不尽な暴力を受けた友人に掛ける言葉がそれなの」

雄二
「お前達を心配する義理はねぇ。そもそも俺は友人とは友達とは思っていない」

鈴（明久）
『『僕（俺）もお前なんか友人とは思っていないッ（ねぇッ）！！』』

と言いながらお仕置きのせいで未だに痛む身体を引きずりながら椅子に座った。

美波
「最初はアキからね。『次の三つの色から当てはまる異性を答えなさい。緑、オレンジ、青』」

明久
「それじゃ緑は美波でオレンジは秀吉で青は姫路さんと鈴」

ビリィッと美波が持っていた本が引き裂かれた。

明久
「み、美波さん……？どうして本を真ん中から引き裂いているのですか？」

美波
「どうして……」

明久
「はい？」

美波
「どうしてウチが緑で瑞樹と鈴が青なのか説明してもらえる？」

明久の答えが気に入らなかったのか美波は凄い勢いで詰め寄る。

鈴

「おいおい、どうしたの。もしかして心理テストの結果が気に入らなかったのか？一体どんな内容のテストだったんだ？」

美波

「べ、別になんだって良いでしょ」

鈴

「ふーん……てっきり俺は『異性と意識している女』が分かるテストだと思っていたんだけどな」

ニヤニヤと笑いながら銀時は言った。

美波

「！！そ、そんなわけないでしょ！！鈴の馬鹿ァッ！！」

顔面に美波の拳が叩き込まれる。

鈴

「て、照れ隠しで人を殴るなよ……」

弱々しい銀時のツッコミに誰も答える人は居ない。
その後も美波から何問も心理テストが出された。
途中で明久が何度も罵倒されていたが何時もの事なので誰もツッコミを入れない

ムッツリーニ
「……（トントン）」

明久
「あ、ムッツリーニ。おはよう」

ムッツリーニ
「空腹で目が覚めた」

ムッツリーニの言葉に銀時はポケットの中から携帯を取り出して時間を確認すると時計の針は１時３０分を指していた。

鈴
「もうこんな時間かよ」

雄二
「どうりでお腹が空くと思ったよ」

銀時達の腹の虫がなる。
その音を聞いた姫路はとびっきりの笑顔で――――

姫路
「ちょっと遅いですけど皆さんで『お昼ご飯』を食べましょうか」

五人
『『『ビクッ！！！！』』』

と、言いながら鞄の中から風呂敷に包まれた弁当箱を取り出した。

姫路
「実はお弁当をたくさん作ってきたんです」

五人
『『『……』』』

銀時達（美波を除く）は今度は嫌な汗を流す。

ここで少し姫路のお弁当について説明をしよう。

彼女は料理が大好きで悪意は全くないのだか……彼女の作る物はとても料理と呼べる物じゃなかった。
何故なら料理の味付けに『科学薬品』を使うからだ。姫路の料理の腕はもはやお妙の『暗黒物質（ダークマター）』とシャマルの『シャマル鍋』よりも強力なので銀時達は何度も臨死体験をする事になった。

姫路
「良かったら明久君達も一緒に……」

雄二
「姫路。悪いが俺は自分で作ってきたんだ」

秀吉
「すまぬ。ワシも自分で用意してしまっての」

ムッツリーニ
「……調理済み」

鈴
「俺もコンビニで昼飯を買ったから大丈夫だ」

雄二と秀吉はお弁当をミッツリーニはカップラーメンを銀時はコンビニで肉まんとサンドイッチ、苺牛乳を姫路に見せながら死の晩餐会（昼飯）を断る。

雄二
「そういうわけで、明久にでもご馳走してやってくれ」

雄二は勝ち誇った笑みを浮かべて明久を生贄に捧げようとしていた。

明久
「ごめん。実は僕も惣菜パンを」

雄二
「おうと。手が滑った（バシィ）」

ムッツリーニ
「……足が滑った（グシャッ）」

明久
「ああっ！！パン！！僕のパン！！」

見事な連携プレーで明久のパンは無残な姿になっていた。

明久
「あはは。ムッツリーニ、雄二、気をつけてよ全く食べ物を粗末に

――――」

雄二
「――――してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分をさせてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ」

明久（雄二）
『『……（ガンのくれ合い）』』

明久
「おと、ゴメン雄二、僕も手が――――」

雄二
「滑らないようにきっちり掴んでおいてやるからな」

明久（雄二）
『『……（メンチの切り合い）』』

必死で死の晩餐会から逃れようとしている明久と生贄に捧げようとしている雄二の間に醜い争いをしていた。

鈴
「ハァ～……仕方かねぇな。ほら、俺の昼飯を分けてやるからこれで我慢しろ」

ポイッと明久に肉まんとイチゴ牛乳を投げ渡す。

明久
「わぁ～ありがとう鈴。これで『普通』の昼ご飯を食べられるよ」

死の晩餐会から逃れる事が出来た明久は嬉しそうな表情を浮かべる。

雄二
「テ、テメェ……せっかくの生贄（明久）を……」

鈴
「悪いな。雄二。姫路の弁当の生贄になるのは……お前だ！！」

雄二
「な、なんだとッ！！」

銀時の言葉に驚愕の表情を浮かべる。
そして銀時は雄二が驚いた一瞬の隙を見逃さなかった。

鈴
「６０ヤードマグナムッ！！」

雄二
「ああ！！俺の弁当ッ！！」

雄二が持っていた弁当を電車の外に蹴り飛ばした。

鈴
「ワリィな。ちょっと足が滑ったわ。お詫びとして姫路の弁当の俺の分を雄二にやるよ」

明久
「羨ましいよ雄二。姫路さんの手料理を食べられるなんて」

今度は立場が完全に逆転した銀時達は勝ち誇った笑みを浮かべる。

雄二
「じょ、冗談じゃねぇ！！俺はまだ死にたくないんだ！！鈴の弁当をよこせッ！！」

死にたくない一心で銀時を押し倒しても弁当を奪い取ろうとしていた。

鈴
「いやだね！！男なら潔く諦めて俺達の為に生贄になりやがれッ！！そしたら骨くらい拾ってやるよ！！」

雄二
「うるせぇッ！！いいから黙って弁当をよこしやがれ！！」

お互いの衣服が乱れ合う

美波
「ちょっ、ちょっと坂本！！何をやっているのよ！！」

姫路
「さ、最低です！！翔子ちゃんがいるのに鈴ちゃんを押し倒すなんて最低です！！」

雄二
「あ？何を言っているんだ。俺は何もやっていないぞ？鈴の弁当を奪おうとしているだけ……でッ！！」

今の銀時の姿を見て雄二は言葉を失っていた。
何故なら今の銀時（しつこいようだか今の銀時は女）の制服が乱れており胸元が少しだけはたけておりスカートもギリギリまで捲り上がっていて少し、いやかなり色っぽくなっていた。

雄二
「……」

???
「……雄二」

雄二
「ハッ！！」

ギギギギと後ろを振り返ると長い黒髪が逆立っており、どす黒いオーラを纏い手にスタンガンを持った美少女？が立っていた。

雄二
「しょ、翔子……何故こんな所にいるんだッ！？」

翔子
「……一緒に行きたかったから雄二のバックの中に隠れて驚か

そうと思った」

雄二
「俺のバックに隠れていたのかッ！！どおりで重いと思ったぞッ！！」

この美少女？の名前は霧島翔子。
学年主席の才女でありＡクラス代表でもある。容姿もさながら無口であるためクールなイメージがついていて学年問わず男子生徒にモテる（銀時は容姿もさながら男口調が受けて男女関係なくモテる）が彼女は坂本雄二一筋なので他の男子生徒は眼中にない。

翔子
「……それよりも雄二」

雄二
「な、なんだ翔子……」

翔子
「……浮気は許さない」

雄二
「ま、待て！！翔子！！話せば分かる……ケベベベベベッ！！（バチバチバチバチバチ）」

問答無用でスタンガン攻撃に雄二は悲鳴をあげる。

鈴
「隙ありッ！！」

雄二
「モゴォッ！？」

電撃を受けている雄二に容赦なく姫路の弁当を口に押し込んだ。
ちなみに明久は姫路達の気を逸らしたおかげで雄二の口に弁当が押し込まれた所を見ていない。

翔子
「……雄二。他の女のお弁当を貰うなんて許さない」

雄二
「……（バチバチバチバチ）」

もはや雄二は悲鳴すら上げなかった。
姫路の弁当を無理矢理食べさせられたうえ、電撃を喰らっている雄二の姿を見て銀時達は言った。

明久
「……ねぇ。鈴。少しやり過ぎじゃないのかな」
鈴
「……あの時の復讐（第五訓参照）のつもりだったんだか、さすがにこれは俺でも同情するぞ……」

少しだけ雄二に同情する二人であった。

ムッツリーニ
「……（真っ青）」
秀吉
「？どうしたんじゃ、土屋よ。顔色が悪いようじゃか」
ムッツリーニ
「……気持ち……悪い……おぼろろろろろッ！！」

長時間の電車の移動とさっきの騒ぎで気持ち悪くなったのかムッツリーニは壮大に（自主規制）を吐いた。

美波
「キャー！！土屋ァ――！！」

鈴
「うおッ！！大丈夫か！？ムッツリ……ヤバい……貰いおぼろろろろろッ！！」

秀吉
「こ、今度は鈴が吐きおったぞ！！」

明久
「ああ！！何か酸っぱい匂いが電車に充満して……うっ！！僕もおぼろろろろろッ！！」

美波
「アキ――――――ッ！！」

まさに阿鼻叫喚。
ムッツリーニ、銀時、明久の（自主規制）の現場を見た他のクラスメイト達も次々と貰い（自主規制）をしていった。

姫路
「美波ちゃん……私も……」

他のクラスメイト達の（自主規制）を見ていた姫路も顔を真っ青にして口を押さえいた。

美波
「だ、駄目よ瑞樹！！此処で吐いたら女の子として終わるわよ！！」

その後、何とか吐かずに済んだ姫路と美波、秀吉は駅に着くと駅員に土下座で謝り、復活したムッツリーニと銀時、明久、他のクラスメイト達と一緒に電車の中を掃除していたせいで予定の時刻を大幅に遅れて合宿所に到着したうえ、鉄人に叱られた事を言うまでもない。

おまけ

咲夜「何か書くたびに駄文になっている気がする……教えて銀八先生は次の話でやります。それじゃあ銀さん次回予告を宜しく」

鈴「はいよ。次回『肝心な時に人を信じられない奴は人を好きになる資格はない』でテイクオフ！！」

教えて銀八先生！！

銀八「教えて」

全員「銀八先生！！」

銀八「そんじゃ、今回のアシスタントを紹介するぞ」

秀吉「今回の銀八先生のアシスタントをする事になった木下秀吉じゃ、宜しくなのじゃ」

銀八「しかし見た目はどう見ても女なのに男なんだろ」

秀吉「！お主とは初めて会うのにワシを男と見抜いたのは雄二と鈴以外で初めてなのじゃ、殆どの人達はワシが男と言っても信じてくれないからのう。ちょっと嬉しいのじゃ」

銀八「そんなの一目見れば分かるぞ。んじゃ、最初の質問を答えるぞ。秀吉。頼む」

秀吉「分かったのじゃ、『ルシフェル』さんから質問じゃ、『銀さんって成績はどれくらいなのですか』って銀さんって誰の事じゃ？ワシらのクラスには居なかったはずじゃか」

銀八「お前は知らなくても良いんだよ。それで銀時の肝心の成績の事だか明久と同等がそれ以上に悪いぞ。アイツは授業中に寝てばかりいるから授業の殆どを聞いていないからな」

秀吉「……何故かよく分からないのじゃか、とてもよく知っている

人物の気がするのう……」

銀八「だから気にするなって言っているだろ。二つ目の質問に行くぞ」

秀吉「何か納得できないのじゃ…三つ目の質問じゃ『今回の罰（第五訓参照）が遭ったみたいたけど、それでも女の子っぽくする気はないの？』これは何と答えればいいのじゃ？」

銀八「これは銀時本人答えてもらうか、頼むぜ銀時」

鈴「誰が女っぽくするかァッ！！俺は男だぞ！！気持ち悪いことを言うなよ！！」

銀八「前は男でも今は女だろ」

鈴「うッ！！」

銀八「んじゃ、質問をくれた『ルシフェル』さん。廊下に立っていなさい」

秀吉「ひょっとして銀さんというのは鈴のことかのう？鈴は銀さんという名前じゃないぞい」

銀八「次は『鳴神　ソラ』さんからの質問だ」

秀吉「無視されてしまったのじゃ！！」

銀八「『フェイト達は何巻目位に出すんだ？』これは俺が答えとくぞ。フェイト達は強化合宿編が終わった後にやる再会編で登場する

予定なので楽しみにしておいてくれ」

秀吉「ところでフェイトって一体誰のことじゃ？」

銀八「それはお楽しみって事だな」

秀吉「…分かったのじゃ、二つ目の質問に行くとしようかのう。『銀さんは観察処分者になったのは明久と同じ時期？』この答えも銀さん…いや、鈴の答えるかのう？」

銀八「当然！！銀時また頼むぞ！！」

鈴「また俺かよ。俺が観察処分者になったのは明久と同じ時期だぞ。まぁ詳しい説明は省くかな」

銀八「それでは三つ目の質問だ『そっちの明久は鈴ちゃんの事で困っている事はある？』これは明久本人に答えて貰うか」

明久「うん、そうだね……鈴で困っている事は仕草かな？鈴はスカートを履いているのに胡坐をかくからし、し、下着が見えているし、肩に手を回しているせいでむ、胸も当たっているからそこに困っているかな」

顔を真っ赤にしながらも明久は答える

銀八「なんだ？仮にも可愛い女の子の下着や胸が当たっているのに嬉しくないか？」

明久「う、嬉しいに決まっているでしょ、僕は男の子だからね！！」

銀八「というわけで『鳴神　ソラ』さん。廊下に立っていなさい」

秀吉「次は『黒龍』さんからの質問じゃ、『どうせ秀吉と付き合ったらどうですか？元男である銀さんと男の娘である秀吉なら釣り合いが取れますよ？』こ、これはどういう意味の質問なのじゃ！！」

銀八「別にそのまんまの意味だろ。何を慌てんだよ。んじゃ、銀時答えてくれ」

鈴「なんだ？なんでこんなに俺に質問が来るの？何か俺に恨みがあるの？」

銀八「それはお前が女になった事が珍しいんだろ。他の質問者が言っていたぜ。そんなことより早く質問に答えろ」

鈴「クッ……他人事だと思いやがって…まぁ、質問の答えだか、悪いが秀吉と付き合う気はねぇな」

銀八「……何か向こうで秀吉が膝を抱えて落ち込んでるぞ」

銀時に言われた事がショックだったのか秀吉は教室の隅っこで膝を抱えて落ち込んでいた。

鈴「あれ？俺、変な事を言ったか？」

銀八「…まぁ、二つ目の質問だ。『女子で付き合うならやっぱり鈴ですか？』そんなわけで秀吉に来た質問だから答えてくれ」

落ち込んでいるにも関わらず銀八は秀吉に聞く。

秀吉「わ、分かったぞい。そうじゃな…やっぱり付き合うのなら鈴がいいぞい。もちろんその時はもうちょっと女の子らしくしてほしいかのう」

銀八「やっぱりお前はアイツの事が好きだろ絶対に……三つ目の質問だ『もし鈴に告白されたらどうしますか？』この質問は明久に来たから答えて貰うか」

明久「うーん…今の鈴が僕に告白すると思えないけど、もし本気で告白してきたなら僕は本気で考えて答えを出すよ」

銀八「とういうわけで質問をくれた『黒龍』さん。廊下に立っていなさい」

秀吉「これで最後の質問じゃ、もう一度『ルシフェル』さんから『姫路のお弁当がアレなので友達として直そうとは思わないのですか？』こ、この質問は……」

銀八「？どうしたんだ？顔が青いぞ？」

銀八先生は姫路の弁当の事を知りません。

秀吉「これはワシらに来た質問だから答えなきゃ駄目かのう」

明久「そ、そうだね…」

雄二「もし俺達が姫路に弁当の事を言ったらどうなると思う？」

鈴「どう考えても俺達が死ぬビジョンが見えてくるな……」

ムッツニーニ「……死は免れがれない」

明久「『ルシフェル』さん。もしお弁当の事を言ったらどうなるかといえば姫路さんは努力家だかた一生懸命料理を作って上達しようとすると思うんだ。でも、そしたら僕達は科学薬品で作った弁当を食べ続けなければいけなくなるんだ」

全員『……』

銀時達の空気が一層に重くなる。

銀八「そ、それではまた次回の銀八先生で会おう。じゃあな！！」

この空気に耐えられなくなった銀八先生はこの場から逃走するのであった。

教えて銀八先生！！（後書き）

うーん…銀八先生が上手く書けないどうすれば上手く書けるんだろう。

後、秀吉の口調は難しいね。

第八訓　肝心な時に人を信じられない奴が人を好きになる資格はない（前書き）

今回はバカテストは休みです

それから今回は姫路達に多少アンチが入ります

そして軽い暴力表現が入るので苦手な人は気をつけて下さい

それでは更新します

第八訓　肝心な時に人を信じられない奴が人を好きになる資格はない

雄二
「ハッ……此処は何処だ？」

明久
「あ！雄二！目が覚めたんだね！……電気ショックが効いたみたいで」

鈴
「お前が前世の罪まで懺悔が始まった時はもう駄目かと思ったぞ」

雄二
「……そこまで俺の命が危なかったのか……」

雄二の蘇生&あの大事件？の後始末が終わった銀時達は合宿所に来ていた。
ちなみに銀時達が泊まる予定の合宿所は文月学園がこの旅館を買い取って召喚獣を召喚出来る様に作り変えたのでちょっと高級ホテルみたいになっていた。

雄二
「そういえばムッツリーニは何処に行ったの？さっきから居ないけど」

鈴
「さぁな、おそらく女子を盗撮や盗聴にいっているんじゃねぇの？」
秀吉
「……仮にも女子であるお主がそういうのはおかしいと思うのじゃか…」

そんな細かい事を銀時は気にしないのであった。

ムッツリーニ
「……ただいま」
明久
「おかえりムッツリーニ」
ムッツリーニ
「……雄二。無事で何より」
雄二
「一応俺の事を心配してくれたんだな。ムッツリーニ」
ムッツリーニ
「……情報が無駄にならずに済んだ」
鈴
「情報？ああ、昨日雄二と明久が頼んだヤツか、結構早かったじゃ

ねぇか」

情報というのは昨日雄二の盗聴　（プロポーズ）と明久の盗撮（メイド服激写）の犯人を特定してほしいとムッツリーニに頼んだヤツだ。

……報酬として銀時の写真（際どい）を引き換えに。

ムッツリーニ

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具を見つけた」

明久

「おおっ。さずかはムッツリーニだね」

ムッツリーニ

「……手口や使用機器から、明久と雄二の件は同一人物の犯行だと断定できる」

雄二

「そうなのか。まぁ、そんな事をする奴は何人もいないだろうし、断定して間違いないだろうな」

鈴

「というか、この学校で盗撮や盗聴に詳しい奴が二人も居るのはおかしいからね。普通の学生でそんな事を詳しく知っていても何も役に立たないからね」

銀時のツッコミに誰も答えなかった。
てゆうか、この小説で常識な事を言ったらストーリーが成り立たなくなってしまう。

雄二
「それで、その犯人は誰だったんだ？」

ムッツリーニ
「……（フルフル）」

明久
「あ、やっぱりまだ犯人は分からないんだね」

ムッツリーニ
「……すまない」

明久
「いや、協力してくれるだけでも感謝だよ」

ムッツリーニ
「……『犯人は女生徒でお尻に火傷の後がある』ということしか分からなかった」

鈴
「お前は一体何を調べていたんだ」

普通はお尻に火傷がある事を分かるはずはない。
ムッツリーニの情報網は恐るべし。

ムッツリーニ
「……校内に網を張った」

そう言いながら鞄の中からノートパソコンを取り出して起動させる。
画面に映し出されたのは女子更衣室だった。

ムッツリーニ
「……小型カメラを昨日学校中に仕掛けた」

明久
「とりあえず何故女子更衣室に仕掛けたか聞かないでおくよ」

鈴
「俺は別に盗撮の事を気にしてねぇから良いけどよ。お前、これを続けていくといつか警察に捕まるぞ」

明久
「思わずスルーする所だったけど、盗撮を気にしないのは女の子として変だからね」

鈴
「うるせぇよ、秀吉と同じ事を言うんじゃねぇよ」

その女子更衣室には顔にモザイクが入っている女子生徒が明久達を脅迫していると思われる人物とメールのやり取りをしていた。

???
《……雄二のプロポーズをもう一つお願い》

雄二
「このメールの内容から考えると……コイツの正体は翔子か！！」

明久
「よっぽど早く雄二のプロポーズを手に入れたいんだね」

???
《毎度。二度目だから安くするよ》

翔子
《……値段はどうでも良いから早く》

???
《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ明日――――と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜日で》

翔子
《……分かった我慢する》

雄二
「あ、危ねぇ……。強化合宿があって助かった……」

明久
「タイムリミットが月曜日まで伸びたね」

鈴
「とは言ってもこの土日は殆ど行動できないだろうから真質は四日しかねぇな」

ムッツリーニ
「……それで、こっちが犯人特定のヒント」

ムッツリーニは更にノートパソコンを操作する。

客
《相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目に遭うんじゃないんですか？》

偽造プロポーズ以外の商品と思われる写真のリスト（おそらく盗撮）

が並んでいた。
その中に脅迫状に同封されていた明久の写真があった。

明久
「あ！！この写真は脅迫状に入っていたヤツと同じだ！！」

秀吉
「これで雄二と明久が同じ人物に脅迫された事が分かったのう」

ムッツリーニ
「……話はまだ終わっていない」

犯人
《ここだけの話、前に一度だけ母親にバレてね》

客
《大丈夫だったんですか？》

犯人
《文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

客
《それはまだ……》

犯人
《おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

ムッツリーニ
「……分かったのはこれだけ」

明久
「なるほどね。お尻の火傷の痕か」

雄二
「今の会話で脅迫犯が女子というのは間違いないみたいだな」

秀吉
「でも、どうするのじゃ、女子生徒のお尻にある火傷を確認するのは難しいぞい」

ムッツリーニ
「……赤外線カメラを使っても火傷の痕は見つけられない」

明久達はどうやってお尻に火傷の痕がある女子生徒を見つける方法を考えていた。
しかし銀時は脅迫犯が女子生徒だということに一つの仮説を立てていた。

鈴
「明久の脅迫犯が女子生徒……脅迫状の内容は『親しい異性に近づ

くな』だったはず……となると、犯人の女子生徒はFクラスの女子に特別な想いを抱いているってことか」

明久
「ねぇ、鈴。さっきから何をブツブツ言っているの？」

銀時がずっと一人で喋っている事を心配した明久がそんな事を聞く。

雄二
「ひょっとして見えない誰がにでも話していたのか？帰ったら良い精神科を紹介してフゲラッ！！」

無言の踵落とし受けた雄二は顔面から机にめり込む。

鈴
「ちげぇよ。……ちょっとこの脅迫犯に心当たりがあるだけだ」

明久（雄二）
「なんだとッ（なんだってッ）！！それは本当か（なの）！！」

脅迫犯に心当たりがあると言った途端に凄い勢いで明久達は銀時に詰め寄る

明久
「それで誰なの！！僕を脅迫していた人は！！」

雄二
「早く言えッ！！鈴！！一刻も早く俺のプロポーズを録音したテープを消したいんだ！！」

鈴
「ダァーッ！！二人ともうるせぇよ！！いっぺんに喋るな！！後、雄二復活が早いな！！」

明久
「う……悪かったよ鈴。それで脅迫犯は誰なのか教えてくれないかな」

鈴
「それはお前達に教えられねぇ」

明久（雄二）
『『なんだとッ（どうしてッ）！！』』

鈴
「教えられねぇ理由は確たる証拠がねぇからだ。もしソイツが犯人じゃなかった場合、明久の脅迫写真をバラ撒かれる可能性がある」

明久（雄二）
『『な、なるほど……』』

銀時の言葉に明久達は納得したような態度を見せる。

鈴
「まぁ、ともかく明久達は今回の強化合宿は大人しくいるほうが賢明だ。脅迫犯がいつどこで目を光らせているかわからねぇからな。尻に火傷がある女子生徒なら俺が何とかして調べてきてやる」

明久
「あ、ありがとう・鈴と秀吉は女湯『秀吉は男だぞ』ち、違うよ！！戸籍は男だけど、中身は可愛い女の子、第三の性別『秀吉』だよ」

鈴
「はいはい」

その時、誰かの腹の虫が鳴る音が聞こえた。

雄二
「……ちょっと小腹が空いたな」

明久
「うん、そうだね。安心したら急にお腹が空いたよ」
ムッツリーニ
「……でも、夕食の時間はまだある」
秀吉
「確かこの合宿所に購買があったと思うのじゃか」
秀吉の言葉を聞いた瞬間に周りの空気が凍る。
明久
「負けた人が購買に食べ物を買いに行くで良いよね」
雄二
「望むところだ」
ムッツリーニ
「……（コクコク）」
鈴
「行くぞ……テメェら！！」
四人
『『『ジャ～ンケンポイ！！』』』

雄二→グー

明久→グー

ムッツリーニ→グー

秀吉→グー

銀時→チョキ

雄二

「鈴の負けだな。んじゃ、俺は焼きそばパンな」

明久

「僕はコロッケパンね」

ムッツリーニ

「……サンドイッチ」

秀吉

「ワシもコロッケパンにしようかのう」

鈴「チ、ジャンケンで負けたなら仕方かねぇな。じゃあ行ってくる」

明久達からお金を貰い、銀時は部屋から出て購買に向かっていた。

数十分後

鈴
「ツイてねぇな、何でイチゴ牛乳が売り切れなんだよ」

お気に入りのイチゴ牛乳が売り切れで少しイライラしていたが

鈴
「ま、イチゴ牛乳が無かったが代わりにチョコクリームメロンパンがあっただけでマシだな」

代わりに文月学園で大人気のチョコクリームメロンパンを手に入れた事で少しだけ機嫌が直った銀時だった。

鈴
「ん？何か部屋の方が騒がしいぞ？」

明久達の部屋が騒がしい事に気づいた銀時は何か嫌な予感がして早足で戻っていく。

明久ＳｌＤＥ

明久
「な、なんのこと、僕達は何もやっていないよ！？」

？？？
「フン！！そんな嘘に騙されると思っているの！！盗撮カメラを仕掛けるのはＦクラスしかありえないわよ！！」

明久
「そ、そんな犯罪を僕達がそんな事をするわけがないじゃないか！！」

？？？
「そうシラを切る気なのね……なら身体に聞くまでよ！！みんなやりなさい！！」

三人
『『『ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！』』』

秀吉
「ま、待つのじゃ！！明久達は旅館に来てからは部屋から一歩も出ておらんぞ！！」

？？？
「木下。こんな変態共を庇う必要はないわよ」

秀吉の弁護を全く聞く耳も持たずに拷問を仕掛ける。
何で明久達がこんな酷い目に遭っている理由は女子風呂に盗撮カメラが見つかったらしい。
カメラを仕掛けた犯人がいつも問題を起こしているFクラスと決め付けてCクラスの代表である小山を筆頭に女子生徒達が乗り込んで来たのだ。

姫路
「明久君。お風呂を覗くのは犯罪ですよ」

美波
「どうやらアキにはお仕置きが必要みたいね。二度と女子風呂を覗く気が起こらない様にしつけないとね」

翔子
「み、美波？姫路さん？さずかにこれは死んじゃうギャアアアアアアア！！」

明久は姫路達からお仕置きとして江戸時代の拷問を受けている。
そして雄二は――――

翔子
「……雄二。女湯を覗くなんて許さない」

雄二
「ま、待て翔子、何の事がさっぱりギャアアアアアアアア！！」

婚約者の翔子からアイアンクローを受けていた。

小山
「どう？素直に吐く気になったかしら？」

三人
『『『……』』』

小山
り「何を気を失っているの。まだ話は終わっていないわよ」

完全に気を失っている明久に蹴りを入れ続けている小山。

小山
「しょうがないわね。水を掛けて『何をやっているんだテメェらァァァァァ！！』！？」

ＳｌＤＥ　ＥＮＤ

鈴
「な、何だこれ……」

目の前に映った光景に銀時は言葉を失う。
何故なら血塗れで気を失っている明久達に蹴りを入れている小山の姿があったからだ。

小山
『しょうがないわね。水でも掛けて「何をやっているんだテメェらァァァァァ」！？』

いきなり怒鳴り声が聞こえて驚いたのか、小山達は声がした方向を振り向く。

姫路（美波）
『『り、鈴　（ちゃん）……』』

小山
「鈴？そう……貴方がこのバカ共と付き合っているあの棗鈴なのね。それで何か私に用かしら？」

鈴
「何をやっているのか聞いているんだよ……なんで明久達をこんな酷い目に遭わせた。テメェらにアイツらが何をした」

全く悪びれる様子を見せない小山達に凄い形相で銀時は睨みつける。

小山
「このバカ共を傷つけた理由？そんなの決まっているでしょ、制裁よ。女子風呂に盗撮カメラを仕掛けたんだから当然の処置よ」

小山の言葉に女子達は一斉に頷く。

鈴
「証拠は？」

小山
「えっ」

鈴
「明久達がやった証拠はあるのかよ」

小山
「そんなのコイツらFクラスというだけで充分よ。こんな事をする奴はFクラス以外に居るのかしら」

Fクラスというだけで犯人なのは当たり前だという態度に銀時の怒りが上がっていく。

美波
「悪いけど鈴。土屋の他にこんな事をする奴はいるの？」

姫路
「土屋君はよく女の子を盗撮していますし、鈴ちゃんもよく盗撮されているから分かると思いますけど」

姫路達も明久達の味方になる所が小山の言葉に同意した事に遂に銀時は怒りを露にする。

鈴
「少し黙れクソ野郎」

物凄い殺気をぶつけられて思わず怯える様子を見せる小山達。

小山
「な、何よ。アンタも女の子なのにコイツらの味方になるの」

鈴
「確かに明久達は普段疑われても仕方かねぇ事をやっている……でも、コイツらは人を傷つける事はしねぇ。魂を見れば分かる」

小山
「魂？何を言っているのアンタ？コイツらの魂なんて腐っているに決まっているでしょ」

鈴
「そうか……」

その一言だけいうと静かに主犯格の小山の所に向かっていく。

鈴
「邪魔だ」

女子1
「えっ……キャッ！！」

扉の近くに居た女子生徒は銀時の裏鉄拳を喰らって鼻血を出しながら襖に吹き飛ぶ。

小山
「ア、アンタ……」

鈴
「女を殴る趣味はねぇが、テメェらみたいなクズは別だ……覚悟しろ」

それからの銀時の暴れぶりはまさに武神と言うしなかった。

主犯格の小山はボディブローを喰らい嘔吐している所にアッパーを受けて気を失い、他の女子達も回し蹴りや踵落としなどの格闘技で気を失っていく。
残りの女子が姫路達三人になると銀時は無言で近づいていった。

鈴
「……お前達に一つ聞きたい。明久や雄二の事が好きなんだよな」

銀時からそんな事を聞かれた姫路達は当たり前の様にこう答える。

姫路（美波）
『『も、もちろん好きですよ（よ）』』

翔子
「……雄二は婚約者」

鈴
「なら何で信じてやらねぇんだ」

女子三人
『『『えっ……』』』

鈴
「例え世界中の奴らが明久の事を信じてやらなかったとしてもお前

達は信じてやれよ。それが仲間って奴じゃないのか」

女子三人
『『『……』』』

鈴「肝心な時に信じてやらねぇ奴が人を好きになる資格はねぇよ」

女子三人
『『『そ、そんな――――』』』

ドコォッ

美波達は言い返そうとしたか銀時の拳が壁にめり込む。

鈴
「……俺はお前達の事を絶対に許さねぇし、認めねぇ。……友人だった時の情けで小山達みたいしねぇよ。だけど、もう俺に近づくな」

銀時の迫力に押されて姫路達はその場にへたり込む。
そんな姫路達の様子を見向きもせずに明久達の所に向かっていく。

鈴
「秀吉。明久達を救護室に連れて行くから手伝ってくれ」
秀吉
「あ、ああ……分かったぞい」

気を失った明久達を背負って銀時と秀吉は部屋から出て行く。
部屋に残された姫路達は無言なまま銀時の背中を見つめていた。

おまけ

桜「ちょっと皆さんにお知らせがあります。今更ですけど、銀時達は一応AクラスとBクラスの試験召喚戦争と清涼祭、プール事件はやっています。ストーリー的に書くことは出来ませんでしたかちゃんとこの事件やイベントは全部やっているので安心して下さい。話は変わりますけど、他の作者が書いているリリカル銀魂を勉強の為に読んでるんですけど、自分の書いている小説と比べてみるとどうしても自分の小説は駄文に見えてしまいます。もし良かったらちゃんと書けているか教えてください」
明久「それじゃあ次回予告をするよ。次回『誤解で謝るくらいなら最初からするな』でテイクオフ！！」

第八訓　肝心な時に人を信じられない奴が人を好きになる資格はない（後書き）

銀さんが転生して女になったら面白そうだなと思って書き始めたけど
銀時が女になったらやっぱり違和感はありますか？それとも面白い
ですか？
後、銀時達の口調はちゃんと合っていますか？

第九訓　誤解で謝るくらいなら最初から疑うな（前書き）

タイトルを少し変更します。

更新します。

第九訓　誤解で謝るくらいなら最初から疑うな

バカテスト　歴史

以下の問いを何と読むが答えなさい。

『新撰組』

姫路瑞樹の答え

『しんせんぐみ』

教師のコメント

正解です。
新撰組はドラマ化や漫画化もしているので名前だけを知っている人が居ますけど、これを機に新撰組を興味を持ってくれると嬉しいです。

吉井明久のコメント

『しんせんぐみ』

教師のコメント

まさか吉井君が正解するとは思いませんでした。
ちゃんと勉強をしているんですね。少し見直しました。

吉井明久のコメント

いやぁ～昨日の夜に歴史のゲームをやっておいて良かった。

教師のコメント

見直した私がバカでした。

棗鈴（坂田銀時）の答え

『チンピラ警察』

教師のコメント

貴方は新撰組に恨みがあるんですか？

桂小太郎の答え

『カス』

土方十四朗のコメント

なんだとカツラァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！

教師のコメント

桂？土方？何故過去の偉人の回答やコメントがあるんですか。

盗撮疑惑を掛けられて理不尽な暴力を姫路達から受けて怪我をした明久達を救護室に運び込み、先生の手当てが終わると銀時と秀吉は寝ている明久達を起こさない様に救護室から出てこれからの事を話し合う。

秀吉

「明久達の怪我が大した事が無くって良かったのう」

鈴「これも救護室の先生の腕が良いおかげだな」

秀吉
「……しかし姫路や島田、霧島も小山達と一緒に拷問するとは……
……いくら普段から疑われても仕方かない行動をしているからとい
っても友人を信じてやらんとはな。ワシでもさずかに腹が立つぞい」

流石の秀吉も姫路達のやり方に怒りを浮かべている。
特に姫路や美波、霧島が明久達に好意を持っていると知っているか
らこそ盗撮犯だと疑う神経が信じられなかった。今までの理不尽な
暴力は笑って許されるかもしれないが今回の盗撮事件の犯人だと疑
った事はもはや冗談で済まされるはずがないし、笑って許されるは
ずがなかった。

鈴「お前が怒こる必要はねぇよ。所詮アイツらの信頼関係はそんな
程度だったって事だ……それで明久達が好きだとよく言える」

秀吉
「鈴……でも、これからどうするのじゃ？さっきはお主が小山
達を押さえ付けたから何とか収まったから良いのじゃか、女子達は
おそらく明久達をまだ盗撮犯だと疑っているはずじゃそ。味方も居
ないこんな状況で真犯人を見つける事が出来るかのう」

数分前に姫路達に怒りを露にしていた秀吉は味方が居ないこの状況で流石に不安そうに言う。
しかし銀時はそんな秀吉の頭をやさしく撫でる。

秀吉
「り、鈴／／／／／いいいきなりなるするのじゃ！！」

鈴
「安心しろ秀吉。学年中に誰もアイツらの味方が居なかったとしても俺達が味方にいればいいだろ。違うのか」

秀吉
「……うん、そうじゃな」

鈴
「それにこれからの事は明久達が起きた時に話すべきだ。今回の事と盗撮犯と疑われた対策や疑った女子達の事も含めてな」

秀吉
「……カッコよすぎるぞ鈴。ワシはお主を事を好きになってしまいそうじゃ（ボソッ）」

鈴
「んっ？何か言ったか？」

秀吉
「いや何でもないのじゃ、それよりも明久達の看病を手伝ってくれるかのう」

鈴
「別にかまわねぇぞ。んじゃ、そろそろ戻るか」

と言いながら銀時達は救護室に戻っていた。

明久SlDE

明久
「あれ？……此処は？」

気付いた明久は今、自分が寝ている所が見慣れた家の部屋じゃなくどこかの旅館の部屋だという事に疑問に思うが、意識が少しずつ覚醒していくつれて徐々に昨夜の事を思い出していく。

明久
（そうか……思い出した。僕達は学力強化合宿に来てたんだっけ……でも、その初日に女子風呂の盗撮犯と疑われて酷い目に遭わされたんだった――――――って、なっ！！）

何気に横に目線を移すと明久の目にどんでもない物が飛び込んでくる。

秀吉
「鈴……」

鈴
「スゥ……」

明久の目の前に銀時の顔が数センチ前にあった（何故か明久の布団の中に入っている）。

明久
「……」

今の銀時は美少女なので健全な男子生徒である明久には刺激が強すぎるのである。
しかも全くの無防備な為に他の男子生徒がいたなら銀時に襲い掛かる（もちろん銀時は返り討ちにする）程の刺激的過ぎる格好だった（どんな格好と言うのなら胸元が少しはたけており白い布が見えていてスカートも捲り上がっている為に下着まで見えている……

あれ？この地の文は前にも書いた様な気がするぞ）

明久
（な、何？この鈴の刺激的すぎる格好は！？と、ともかく早く服を直さないと僕はオオカミになってしまう！！）

明久はそう思いながら銀時の服装を直す為に手を伸ばす。

秀吉
「お、明久よ。目が覚めたようじゃな」

明久
「ひ、秀吉！！」

しかし身体に触れようとした瞬間に秀吉が部屋に入ってきてしまい服を直せないままで終わってしまった。

明久ＳｌＤＥ　ＥＮＤ

秀吉
「もう怪我は大丈夫かのう」

明久
「う、うん！！大丈夫だよ！！」

秀吉
「？それは良かったのじゃ」

雄二
「イテテテ……此処は何処だ？」

ムッツリーニ
「……同じく」

明久
「雄二にムッツリーニ！！」

秀吉
「お主達も目が覚めて良かったのじゃ」

それと同時に雄二とムッツリーニも目を覚ました。
ちなみに今の銀時の服装に気づいた秀吉達は顔を真っ赤（一人は鼻血を出して再び血の海に沈み）にしながら直したらしい。

雄二
「昨日、翔子達から盗撮犯と疑われて拷問を受けた後から記憶が無いんだか……秀吉は何か知らないか？」

秀吉
「その事なら今から説明をしようと思ったところじゃ」

～秀吉説明中～

雄二
「なるほどな。あの鈴がそんな事を言っていたのか……」

明久
「いつも馬鹿な事をしてたけど、そんなに僕達の事を信頼していてくれたなんてちょっと嬉しいね。ムッツリーニはどう思……う？」

明久は目の前の光景？に唖然した。
何故ならいつの間にかムッツリーニはカメラを取り出して銀時の寝顔と姿を撮っていたからだ。

ムッツリーニ
「……何か言ったか、明久」

三人
『『『台無しだァッ（なのじゃッ）！！』』』

そんな明久達のツッコミが早朝の合宿所に木霊した。

秀吉
「それで雄二達はこの盗撮事件はどうするつもりなのじゃ？鈴はお主達が起きた時に考えると言っていたのじゃか」

ようやくあの騒ぎが落ち着き制服に着替えながら雄二は秀吉の問いに答える。

雄二
「そうだな。確かにこの問題は俺達の状況を知っている奴と話し合う方が早く解決ができるかもしれないな。ほら鈴、言い出しっぺのお前がいつまでも寝ていないでいい加減起きやがれ『グハァッ！！』」

未だに気持ち良さそうに寝ている銀時に雄二は蹴りを入れて叩き起

こした。

秀吉
「盗撮犯と疑われた時に庇ってくれた鈴をお主は蹴りで起こすのじゃな……」

場所が変わって此処は合宿所の食堂。

明久
「それで雄二。この後はどうするの？やっぱり盗撮犯と脅迫犯の二人を探すの？」

雄二
「いや、此処は盗撮犯を探すのが懸命だな。盗撮犯を特定できれば脅迫犯も捕まえる事ができるはずだ」

秀吉
「坂本よ。どうしてそんな事が言えるのじゃ？今回の盗撮事件とお主達の脅迫事件とあるのかのう？」

雄二
「ああ、おそらく今回の盗撮事件の犯人と脅迫事件の犯人は同一人物だ。明久を盗撮犯の汚名を着せて目的の人物から引き離したいんだろうよ」

明久
「……そこまでして僕から女子を引き離したい理由はなんだろう？」

雄二
「さぁな。そんなの犯人を捕まえれば分かるだろ」

雄二はそう言いながら朝食である焼き魚を食べる。

明久
「でも、どうやって今回の犯人を見つけるの？本当に覗きをやるわけに行かないし…はぁ～、本当にどうすれば良いんだろう」

鈴
「そこは俺に任せろ」

今まで黙って話を聞いていた銀時は明久達の会話に加わる。

鈴
「昨日も言ったが、こうなった以上お前達は本当に大人しくしていた方が良いな。盗撮犯と疑われているこの状況では尚更だ」

明久
「……うん、そうだね」

雄二
「ここは鈴の言うとおりにした方が良さそうだな……頼むぞ」

鈴
「ああ……任せな。雄二に明久」

その後は盗撮犯と疑われた事に対する対策や他の女子達への対策を話し合っている内に朝食の時間が終わって1限目の時間になった。

明久
「そういえば1限目は何だっけ？」

雄二
「1限目は教師の連中に用事があって自習になったらしいぞ」

明久
「自習？やった！！面倒くさい授業を受けずに済むよ！！」

秀吉
「お主は真面目に勉強するという選択肢はないのじゃな……」

朝食の片付けが終わった銀時達は学習室に向かいながらそんな事を話していた。

鈴
「あ、悪い。ちょっと忘れ物をしたから部屋に取ってくるわ」

明久
「忘れ物？一体何を忘れたの？」

鈴
「筆記用具全部」

三人
『『『……』』』

その言葉に明久達は銀時を少し冷たい目で見つめている。

鈴
「っていうわけだから、俺に構わず先に学習室に行って良いぞ」

明久達の目線に気づかないまま銀時は部屋に筆記用具を部屋に向か

ってに行った。

鈴
「昨日と騒ぎのせいで鞄を明久達の部屋に置いたままだった事をすっかり忘れてた」

そう言いながら銀時は明久達の部屋に入り、自分の鞄の中から筆記用具を取り出して学習室に戻ろうとするが

鈴
「……俺の前に二度と現れるなと言ったはずだか」

銀時は誰かの気配を感じたのか、誰もいない部屋の入口に冷めた声で呼びかける。
すると、部屋の死角から姫路と島田、翔子の三人が出てきた。

姫路
「……鈴ちゃんに謝りたい事があるんです」

鈴

「……俺に謝りたいこと？」

姫路

「はい……さっき、明久君達との話を聞かせてもらいました……」

美波

「あの盗撮カメラを仕掛けたのはアキ達じゃなかったのね……」

翔子

「……誤解ならちゃんと鈴と雄二達に謝らなきゃいけないから……」

先程の明久達と銀時の会話を偶然聞いて明久達が無実だったうえ、誰かに脅迫をされていた事を知った姫路達は謝る。

しかし銀時は

鈴

「ふーん……話はそれだけか、それなら俺はもう行くぞ、明久達を待たせているからな」

まるで姫路達の話など興味が無さそうな態度を見せて銀時はこの場を去ろうとしていると

姫路
「ま、待って下さい！！」

鈴
「……なんだよ」

銀時は冷たい表情で姫路達に振り向く。

姫路
「確かに明久君達を証拠もないのに盗撮犯と疑った私達が悪いです……でも！！鈴ちゃんは……誤解と分かって謝る事は間違っているんですかッ！！」

美波
「そうよ！！ウチ達はアキ達を疑った事を本当に悪かったと思っているから謝っているのにそんな言い方は無いんじゃない！！」

翔子
「……」

姫路と美波は涙声でそう言ってくる。
翔子は何も言わなかったが姫路達と同じ気持ちだった。

しかしそんな言葉を聞いても銀時は冷たい表情を崩さずに言った。

鈴
「……最初から明久達を信じてやらなかったくせに誤解と分かった途端に謝るとか、お前達は何様のつもりだ」

女子三人
『『『えっ……』』』

鈴
「誤解で謝るくらいなら最初から疑うんじゃねぇよ……なら最初から犯人じゃないと言っている明久達を信じてやれよッ！！」

銀時の言葉に美波達は何も答える事が出来ない。

鈴
「お前達はアイツらの一体何を見てきたんだ……今まで誰の為に明久達があんなに頑張ってきたと思っているんだ」

女子三人
『『『……』』』

鈴
「お前達はアイツらの頑張りを見てなかったのか……お前達は本当

に明久達が盗撮をする奴に見えるのか。何も見てねぇ奴らがよく明久や雄二の事が好きだとよく言えるな」

銀時の一つ一つの言葉が美波達の胸に突き刺さる。
特に姫路と美波は罪悪感に押し潰されそうになった。
振り分け試験の時に風邪で倒れた時に教師から庇ってくれたことや姫路の為にAクラスに挑み、設備を手に入れようとしてくれたり、学園祭で姫路の転校阻止や不良に誘拐された時に一番姫路達を心配して助けてくれたのは明久達だった。

姫路
「鈴ちゃんの言うとおりです……明久君達は……今まで私達の為に頑張ってきたのに……そんな人達を盗撮犯と疑うなんて最低です……！！」

美波
「……瑞樹だけのせいじゃないわよ。ウチも証拠もないのに盗撮カメラを仕掛けたのはアキ達と決め付けて拷問したんだから鈴が怒るのは当然だし、嫌われるのは当然よね……」

翔子
「……私も雄二の事を婚約者と言っているのに信じてあげなかった、私も美波と瑞樹と同罪……」

姫路は自分がやってしまった事を涙を流しながら後悔をしていて美波と翔子は涙は見せないでも自分達は取り返しがつかない事をしてしまったと理解をしていた。

鈴
「悪いがお前達が後悔して泣こうか俺は可哀想だとおもわねぇし、同情もしねぇよ。むしろこれは明久達を裏切った事の償いだ」

女子三人
『『『はい……』』』

鈴
「……明久達は女に甘いから謝れば許してくれると思うが、本当に悪いと思っているなら自分自身でちゃんとケジメを取るんだな」

姫路
「あ、あの！！……ケジメってどうやって取れば良いんですか？」

鈴
「そんなの自分達で考えろ。悪いがそこまで面倒を見る筋合いはねぇよ」

と、言って今度こそ銀時はその場を去った。

場所は変わって学習室

鈴
「悪いな秀吉。少し遅れたけど気にしないでくれや」

秀吉
「相変わらず少しの気持ちが込められていない謝罪じゃな」

鈴
「ほっとけ」

銀時はそんな軽口を叩きながら秀吉が座っている場所に行くが、いつものメンバーである明久と雄二、ムッツリーニが居なかった。

鈴
「ところで秀吉。あのバカ達は何処に行ったんだ？トイレでも行ったのか？」

秀吉
「……明久達なら昨日の盗撮事件の事で教師達から取り調べを受けておる」

鈴
「…まぁ、それはそうだな。盗撮事件が起こった以上は教師として

怪しい生徒から話を聞くのが普通だな」

そう言い終わると同時に教師達からの取調べが終わった明久達が学習室に入ってくる。

明久
「……僕達は教師達からも信用されていないみたいだね」

雄二
「それはそうだろう、なにせ俺達は普段の行いが悪いからな」

ムッツリーニ
「……それでも少し凹む」

明久達の普段から行いが悪かったといえ、女子生徒達からだけじゃなく教師達からも疑われた事に流石に落ち込んでいた。

鈴
「別に疑う奴はほっといても構わないだろ。お前達は盗撮をやってねぇ、それならば堂々としていれば良いい。それに真犯人を疑った奴らに突きつけて謝らせれば最高じゃねぇか」

しかし銀時は落ち込んでる明久達に元気をづけようと不適に笑みを浮かべながらそんな事を言う。

明久
「鈴……」

雄二
「フン、言うじゃねぇか」

ムッツリーニ
「……可愛い顔しているのに言うときは言う」

秀吉
「鈴の言うとおりじゃな。真犯人を必ず見つけてワシ達を盗撮犯と疑った女子達と教師達を見返してやるのじゃ！！」

五人
『『『おお――――――――ッ！！』』』

必ず真犯人を捕まえる。
そんな明久達の気持ちが揃った瞬間だった。

鉄人
「（ガラッ）うるさいぞッ！！自習中は静かにせんかッ！！」
五人
『『『すいません鉄人！！』』』

……イマイチ決まらない銀時達である。

？？？
「ハハハハ、何を話しているのかなぁ？吉井君達は？」

いきなり話しかけてきたのはライトグリーンのベリーショートで少しボーイッシュな感じがする少女、
工藤愛子だ。

明久
「べ、別に変な事を話でいないよ！！」

工藤
「ふーん、まぁ、いいや。それよりも聞いたよ。吉井君達って女子風呂に盗撮カメラを仕掛けたんだみたいだね」

ヘラヘラと笑いながら工藤は言ってくる。

明久
「だ、だから僕達はそんな事をやっていないってば！！」

工藤
「大丈夫。吉井君達がそんな事をやってない事はボクは分かっているよ。それに証拠も無いのに犯人扱いをしたら他の女子達みたいに鈴ちゃんから折檻を受けちゃうよ」

雄二
「工藤、御託は良いから早く用件を言え。俺達に用事があるから此処に来たんだろう」

工藤
「流石は元神童と呼ばれた坂本君、勘が良いね。それじゃあこっちの用件を言うけど」

工藤は誰にも聞き取られない様に小声で明久達の耳元で囁く。

工藤
「女子風呂にまだ見つかっていないカメラがあるよ」

明久
「！！……工藤さん。それは本当なの？」

工藤
「うん、本当だよ」

明久
「……工藤さん。一つ聞きたい事があるんだけど、良いかな？」

工藤
「別に構わないよ。あ、もしボクのスリーサイズの事なら後で二人きりの時に教えてあげる♪」

明久
「いや、そうじゃなくて……どうしてカメラがもう一つ仕掛けられている事が分かったの？もしかして盗撮犯は君なの？」

工藤
「そうだよって言ったらどうするの吉井君？」

少しからかう様に工藤は明久達に冗談を言うが、

鈴
「もしお前が本当に犯人なら……容赦はしない」

工藤

「（ゾクッ）……ご、ごめんね。今のは冗談だよ。初日にカメラが見つかった時に念のために他の場所も探してみたら別の場所にもう一つカメラが仕掛けられていたんだ」

銀時のドスが効いた声に思わず身震いし、冗談を言った事を謝った。

雄二
「いや、別に気にしてねぇよ……そんな事よりも他にカメラは無かったのか？」

工藤
「うん、見つかったのは最初に見つかった奴とボクが見つけた二つだけたよ」

女子風呂に二つのカメラが仕掛けられていた。
しかもその一つはあっさりと発見されている。
そこから導かれえる答えは……

鈴
「……最初に見つかったカメラは囮で女子達と教師達の疑惑の目を俺達に向けて本命のカメラを回収するのが目的だろうよ」

明久
「クソッ！！……僕達は真犯人の隠れ蓑にされたってわけかよ！！」

雄二
「明久。悔しい気持ちは分かるが、何も悪い事だけじゃない。これはチャンスでもある。真犯人を捕まえる為のな」

真犯人にどんな理由があったとしても自分達は真犯人に利用されたうえ、その罪まで被せられた事に明久達は怒りの表情を浮かべている。
でも、それは雄二の言うとおりにこの盗撮事件の解決を出きる唯一のチャンスが来たのだ。

明久
「……じゃあ僕達はカメラを回収に来た所を捕まえれば良いんだね」

鈴
「いや、それは駄目だな。結局は証拠もないのに捕まえても簡単に言い逃れできる」

明久
「それじゃあどうするのさぁ」

鈴
「俺に作戦がある。それもすげぇ作戦がな。それに疑った女子達の罰も必要だ。もちろん工藤にも協力してもらうぞ」

銀時はニヤリと笑みを浮かべながら工藤を含めて再び作戦を練るのであった。

おまけ

咲夜「皆さんに報告があります。まず一つ目は自分のユーザ名を変えました。二つ目は残り四話を書いたらなのは達と再会する『再会編』をやります。でも、合宿編は後、二話で終わらせますので残り二話はなのは達の世界に行く事になるストーリーの予定です。後、今回から少し書き方を変えてみました、どうでしょう読み易いでしょうか？それじゃあ次回予告は雄二がやってくれ」

雄二「はいよ。次回は『作戦には犠牲がつきものだ』でテイクオフ！！…あ、言い忘れたがあった。教えて銀八先生はバカテスト編が終わったらやるみたいだから待っていてくれよ」

第九訓　誤解で謝るくらいなら最初から疑うな（後書き）

何か書くたびに駄文になっていく気がする
それから地の文を増やした方が良いでしょうか。
もっと黒神さんみたいな文章力と表現力がほしいです。

今日、久しぶりにお気に入り登録を見たらが一人減っていた……
まだお気に入り登録が少ない状況（登録が少ないのはまだ話数が少ないかもしれないけど）で更に減っていました……かなり凹みます
……何故お気に入り登録が少ないんだぁ――――――！！（心の叫び）

第十訓　作戦に犠牲がつきものだ（前書き）

咲夜「これまで投稿したリリカル銀魂の話数を改稿しました」

明久

「それではリリカル銀魂始まります」

第十訓　作戦に犠牲がつきものだ

バカテスト　歴史？

以下の問いに答えなさい。

新撰組の局長だった人物を答えなさい

姫路瑞樹の答え

『近藤勇』

教師のコメント

正解です。他にコメントはありませ

棗鈴（坂田銀時）の答え

『ストーカーゴリラ』

教師のコメント

貴方は最近勉強をナメていませんか？
後で補習室に来るように全教科の先生方による勉強が待っていますよ

スパル・ナカジマの答え

『ゴリさん』

志村お妙の答え

『ストーカーゴリラ』

教師のコメント

歴史の偉人はゴリさんでもストーカーゴリラでもありません。

近藤勲のコメント

お妙さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！

志村妙のコメント

来るなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！このストーカーゴリラ野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

教師のコメント

答案に付いている血痕が不気味です。

三日後

明久達の部屋

明久
「ねぇ、鈴。あれからもう三日も経ったけど、まだ行動を起こさないの？もう明日しかチャンスがないよ」

心配そうに明久は銀時に聞く。
合宿初日に盗撮犯と疑われてからもう三日も経っていた。
あの後、銀時は作戦があると言っていたが、具体的な事を何も話していないので明久が不安になるのも当たり前だ。

しかし当の本人である銀時は焦る様子をみせるところが、むしろかなりの余裕があるのかうつ伏せになりながらジャンプを読んでいた

鈴
「あん？何か言ったか明久？」

明久
「だから合宿が終わるのは明日だよ！！三日前に鈴が作戦があると言っていたのに何も教えてくれないから不安になるのは当たり前でしょ！！」

鈴
「少し落ち着けよ明久……まぁ、確かにお前の言うとおり作戦の事を話すべきかもな」

と、言って銀時はジャンプを読むのを一旦止めてうつ伏せから座布団の上に座り直す。

明久
「なら早くその作戦を教えてよ」

鈴
「いや、もう少し待ってくれ。作戦を話すのは工藤から確認のメールが来た後だ」

明久
「確認メールって、やっぱり列の『あの子』のこと？」

鈴
「まぁな。この三日間はソイツの監視と風呂で尻に火傷がある事を確認、そして盗撮カメラの出所を調べて貰っている――――――――と、ちょうど確認のメールが来たな」

工藤のメールを受信したと思われる携帯の着信音が流れる（着信音は仮面ライダー●ーズの●シャドルコンボのテーマソング）

明久
「……何かこの小説で流れちゃいけない音楽が聞こえた気がする……っていうか、この小説はコラボ小説なんだからバカテストと銀魂に関係ある曲にしようよ」

鈴
「しょうがねぇだろ。この曲を選んだのは作者がお気に入りだからだぞ、それに仮面ライダー●ーズもコラボしているんだから問題はねぇはずだ」

第一、これは二次創作だし、実際に音楽が流れたわけじゃないから大丈夫なはず（多分）

雄二
「おいバカ共と地の文、メタな会話をするのは止めろ」

鈴（明久）
『『誰がバカだッ！！』』

こいつらみたいなバカ達と一緒にするな！！

鈴（明久）
『『なんだとッ！！喧嘩売ってるのか！！』』

秀吉
「……鈴よ。確認のメールが来たなら早く作戦を教えてくれんかのう。話が進まん」

鈴
「あ、ワリぃ……ゴホン……んじゃ、工藤から確認が取れたから作戦を説明するぞ」

気を取り直して作戦の説明を始まる。
銀時の作戦は……男子生徒全員が女子風呂を覗く事だった。

三人
『『『って、これが作戦なのか（のう）！？』』』

風呂を覗く事が作戦だという事に明久達のツッコミが揃う。

鈴
「なんだよお前達。その反応は？何か人の作戦に不満でもあるわけ」

明久
「不満も何もこんな短い作戦なら地の文で説明しないで良いじゃん！！てっきり凄い作戦だと思うし、なりよりも何の作戦が楽しみにしていたこの小説の読者がガッカリするよ！！」

雄二
「いや明久。ツッコミを入れる所が間違っているぞ」

雄二は明久が違う所にツッコミを入れた事にツッコミを入れる。

秀吉

「鈴よ。一つ聞きたい事があるのじゃか良いかのう」

鈴

「聞きたいこと？それはなんだ秀吉」

秀吉

「お主はさっき女子風呂を覗くのが作戦だと言ったが、それをやってしまったらワシ達は盗撮犯と同じになってしまうぞい。それどころかせっかくワシらを庇った鈴の立場がなくなると思うのじゃか……」

秀吉は自分の疑問を銀時にぶつけた。

それは当たり前かもしれない、合宿初日に盗撮犯と疑われて証拠もないのに理不尽な暴力を受けた明久達を庇って女子達に制裁をしておきながら自分達が覗きをやってしまったら明久達を庇った銀時の立場がなくなるうえ、明久達を盗撮犯と疑った女子達が正しかったことになってしまう。

鈴

「大丈夫だって、俺達がやるのはあくまでも男子生徒全員を巻き込んで覗き騒ぎを起こすことだ。それに盗撮犯と疑った女子達の罰がこれだからな」

そんな秀吉の疑問に銀時はあっさり答えて四つんばいになりながら

隣にある自分の鞄の中から板チョコを取り出す。
ちなみにこの時のムッツリーニは夢中でスカートの中の写真を撮っていた。

雄二
「しかしだな鈴。仮にこの作戦を実行したとしても盗撮犯のアイツを捕まえられないだろ。そこはちゃんと考えているんだろうな」

鈴
「当たり前だろ。何も年頃の女子の裸を見たいと思う男子の欲望と一緒にするんじゃねぇよ。騒ぎを起こせば盗撮犯は何かしらの行動をするはずだ。その時に捕まえればいいだろ」

ニヤリと笑いながら銀時は板チョコを食べた。
不敵に笑う姿を見て雄二達は銀時が言った言葉の意図を悟った。

雄二
「……そうか鈴の作戦が分かったぞ」

秀吉
「確かにその作戦じゃと、犯人がカメラの事を心配で回収する為に来た所を捕まえることが出来るぞい」

ムッツリーニ

「……簡単だか一番確実な作戦」

雄二達は銀時の作戦を理解してそのやり方なら犯人を捕まえられると確信していた。

明久
「えっ、みんな鈴の作戦が分かったの？」

しかし一人のバカ（明久）だけは理解していなかった

雄二
「お前は……本当にバカだな」

明久
「ムッ、雄二。それはどういう意味かな？」

雄二
「そのままの意味だ。まぁ、お前みたいなバカでも分かりやすく説明するとだな。もしお前が本当に女子風呂にカメラを仕掛けたとする、そこでもしカメラが壊れる様な騒ぎが起こったなら仕掛けた本人であるお前はどうする？」

明久
「それはもちろんカメラが壊れていないが心配して回収するけど……って、あ！！そういう意味か！！」

雄二
「ようやく理解したかバカか」

雄二の分かりやすい説明に明久はようやく理解した。
だか、雄二達は明久のあまりの頭の悪さに少しだけ将来が心配になる。

明久
「うがッ――――！！また地の文に馬鹿にされたッ――――！！」

雄二
「うるせいぞ明久。お前が馬鹿にされるのはいつも事だろバカか」

明久と雄二は殴りあいの喧嘩中……

秀吉
「しかし鈴よ。お主の作戦でいくならクラスメイトや他のクラスの奴らを利用するってことじゃろ。少し負い目を感じるのじゃか……」

鈴
「だから協力したお礼として女子の裸を見せてやればいいだろ。そしたらアイツらはその光景を目に焼き付けて家に帰ったら●カズにして●ナニーをするだろうから満足するだろ」

相変わらずの銀時の過激な下ネタに明久達（喧嘩を止めて）は言葉を無くしていた。

雄二
「……前々から思っていたが、コイツは本当に女なのか」

明久
「ずっと一緒に居たからある程度はなれたけど……」

秀吉
「それでも鈴が卑猥な言葉を言うと緊張する事があるぞい」

ムッツリーニ
「……」

確かに見た目が完全な美少女の口から卑猥な言葉を言えば興奮する男子はいるかもしれない。
その証拠にムッツリーニはいやらしい想像をしたのか、鼻血を出し

て倒れていた。

雄二
「！！誰だ！！俺達の話を聞いているのは！！」

自分達の部屋の前で人の気配を感じて扉を開けると

四人
『『『キャッ！！』』』

四人の女子生徒が悲鳴を上げながら部屋になだれ込んで来た。

明久
「ひ、姫路さん……美波……」

姫路（美波）
『『明久（アキ）君……』』

翔子

「……雄二」

雄二

「翔子……」

突然、姫路達が部屋になだれ込んで来た事に明久達は驚きの表情を浮かべていた。

秀吉

「……何か用かのう。姫路に島田、霧島よ」

真っ先に反応した秀吉は不機嫌な表情になる。

それは当たり前かもしれない、明久達を好きと言っているくせに信じようとせずに拷問した姫路達を許しているわけがなかった。

姫路

「あ、あの……お風呂を覗くのを私達も協力させて下さい！！」

全員

『『『なにぃッ！！』』』

しかしそんな怒りを見せていた秀吉も姫路達の言葉には驚きを隠せない。
常識で考えれば女の子が女子風呂の覗き（銀時を除く）に協力をするということはおかしいからだ。

明久
「姫路さん達が協力するって……いきなりどうして？」

姫路
「……私達、三日前に偶然、明久君達が話している事を聞いたんです……明久君達が脅迫されていたこと……そしてあのカメラを仕掛けたのは明久君達じゃなかったって事も……」

申し訳なさそうに姫路は言う。
どうやらカメラを仕掛けたのは明久達じゃなかった事や脅迫されていたことに気づかずに疑ったうえ、拷問した事に負い目を感じているらしい。

美波
「それでウチ達もアキ達とは別に犯人を捜していたの」

翔子
「……愛子から犯人の特徴と女子生徒の可能性があると聞いた」

姫路
「そして私達も明久君達と同じ様に犯人が誰なのか突き止めてました」

翔子
「……だから私達も雄二達を嵌めた犯人を捕まえる事に協力させてほしい」

疑って拷問した罪滅ぼしなのか、犯人を捕まえる為に協力させてほしいと姫路達は言い出した。

秀吉
「そ、そんな都合がモゴォッ！！」

もちろん明久達の信じようとせずに拷問しておきながらそんな事は都合が良すぎると秀吉は文句を言おうとしたが、銀時に口を塞がれてしまう。

秀吉
（何故止めるのじゃ！？姫路達は明久達の言葉を信じようとせずに小山達と一緒に拷問したのじゃぞ）

鈴
「……」

止められて秀吉は銀時に文句を言う。
しかし銀時は全てわかっているかの様で黙っていた。

明久
「……そうなんだ。ありがとうね。姫路さんに美波に霧島さん」

雄二
「協力いてくれるのは有り難いが無理をしないでくれよ。怪我なんかいたら元も子もないからな」

女子三人
『『『えっ……』』』

明久
「？……どうしたの三人共？」

姫路
「い、いえ、何でもありません。明久君……」

自分達が協力すると言ったらあっさりと許可をくれた事に姫路達は

不思議に思う。
最終的に協力する事になっても明久達は最後まで反対してくれていたのに今回はあっさりとくれた疑問に思うがそんな事を聞ける雰囲気ではなかった。

明久
「それじゃあ姫路さん達はそろそろ部屋に戻った方が良いよ。消灯時間が近いし、こんな時間まで女子が男子の部屋に居たら先生達に叱られちゃうからね」

雄二
「翔子も姫路達と一緒に部屋に戻った方が良い。作戦の事なら明日に話すから良いだろ」

女子三人
『『『は、はい……』』』

なんで鈴ちゃんも同じ女子なのに言わないの？
なんで自分達も作戦会議に参加させてくれないの？と理由を聞きたかったか、その事すらも理由が聞けなかった。
何故かは分からないが、明久達からプレッシャーを感じたからだ。

姫路
「あの……明久君」

明久
「何かな姫路さん？」

姫路
「初日に明久君達の事を盗撮犯と疑ってすいませんでした……」

明久
「いや。僕達は普段の行いが悪かったから疑われただけだから気にしないで良いよ」

姫路
「明久君……」

姫路はそれだけを言うと美波達と一緒に自分達の部屋に戻っていた。そして姫路達が出ていく事を確認すると部屋に残された工藤が銀時達に近づいてきて話しかけてくる。

工藤
「ねぇ、鈴ちゃん。少し良いかな？」

鈴
「あれ？工藤。お前居たの？」

工藤
「し、失礼だなぁ！！今までセリフが無かっただけで最初からずっ

と居たよ！！」

詳しくは姫路達が明久達の部屋に来た文を見てね☆

鈴
「んで、俺に何か用か？」

工藤
「何か腑に落ちないけど……まぁいいや。ところでよく吉井君達は姫路さん達が覗きに協力する事をゆるしたよね」

鈴
「……それはどういう意味だ」

工藤
「いや、ちょっとあっさり過ぎるかなと思ってね。いつもの吉井君達なら代表や姫路さん達を自分達の為なんかに巻き込む訳にはいかないと最後まで反対すると思ったんだけど……」

工藤は苦笑いをしながら自分の頬を？いた。
確かにいつもの明久達なら工藤の言うとおり姫路達が自分達の為に覗きをやると言ったら最後まで反対しただろう。
それをやらなかったって事は考えられる事は一つ、

鈴
「……さぁな。ひょっとしたら明久達は姫路達への気持ち冷めたかもしれないな」

工藤
「ええッ！！」

鈴
「そんなに驚くことはねぇだろ。どこの世界に自分達の事を信じずに拷問した女を惚れたままのヤツがいるよ。どう考えてもそれが普通の反応だろ」

工藤
「……何とかならないのかな」

工藤はそう言って悲しそうな顔をした。
やっぱり工藤も霧島と姫路達が雄二と明久に好意を持っていると分かっているからこそ明久達の気持ちがこのまま冷めてしまうのはあまりにも可哀想過ぎると思ったんだろう。
その気持ちは工藤自身も女の子だから間違ってはいないし、無理もない。
しかし銀時にとってはそんな事は関係がなかった。

鈴
「ならないね。そもそも明久達を盗撮犯と疑わずに最初から信じてやればこんな事は起こらなかったんだ。自業自得だろ」

工藤
「……ちょっと冷たくない？」

鈴
「そうか？至極当然な事を言っていると思うけどな」

と、つまんなそうに言って鞄の中から板チョコを取り出して再び食べ始める。

秀吉
「なるほど、だから鈴は文句を言おうとしたワシを止めたんじゃな」

鈴
「まぁな、あの時にお前が文句を言おうが言うまいがどの道アイツらは疑った報いを受ける事になっていたからな――――――って、あれ？秀吉。いつの間にここに来たんだ？明久達と一緒に作戦会議をしていたんじゃないのか？」

さっきまで明久達と一緒に作戦会議をしていた秀吉がいつの間にか銀時と工藤の後ろにいた。

秀吉
「明久達の作戦会議がとりあえず終わったから鈴達の所に行ったら偶然会話が聞こえたのじゃ」

工藤
「ハハハ、駄目だよ秀吉君。女の子同士の秘密の会話を盗み聞きをしたら鈴ちゃんに嫌われちゃうよ」

工藤はまるで秀吉の事をからかう様に笑いながら言う。

秀吉
「べ、別に盗み聞きをするつもりはなかったのじゃ！！お主達の会話を聞いたのは本当に偶然なのじゃ！！」

そして何故か秀吉は必死で銀時に言い訳をしていた。

工藤
「フーン、秀吉君はそう言っているけど、どうするーーーーって、鈴ちゃん！？一体何枚板チョコを食べているの！？」

鈴
「んっ？」

思わず工藤は銀時が食べたチョコの量にツッコミを入れる。
地の文では詳しい描写を書けなかったが銀時はこの会話中に少なくともチョコを八枚も食べていた。

鈴
「あー、俺ね。定期的に糖分を摂取しないとイライラするんだよね、だから俺の鞄の中にはチョコが２０枚も蓄えられている」

工藤
「２０枚も！？そんなに食べたら糖尿病になるし、太るよ！！」

鈴
「俺は短く太く生きようと決めたの。それに俺はスタイルの事は気にしねぇよ」

身体が女でも心や精神が男である銀時にとってはスタイルは全く気にしていない。
むしろ女らしくなっていく身体や胸が邪魔だと思っているくらいだ。

秀吉
「ワシは太った鈴を見るのは嫌なのじゃ（ボソッ）」

秀吉のその呟きは誰にも聞こえていない。

雄二
『おーい、鈴。悪いが少しこっちに来てくれないか』

鈴
「お、どうやらムッツリーニと明久と雄二の話が終わったみたいだな。行くぞお前ら」

作戦会議が終わったのにも関わらず話し合いをしていた三人に呼ばれ、銀時達はその場所に向かっていく。

鈴
「どうたムッツリーニに明久と雄二。話し合いが終わったなら早く作戦を教えてくれ」

雄二

「ああ、だか、その前に鈴にはこれを来てもらう」

雄二はそういいながら鈴に浴衣を差し出す。

鈴
「？俺が浴衣を着てどうするんだ？作戦に必要あるのか？」

雄二
「勿論だ、お前がこの浴衣を着てムッツリーニの写真撮影をされる事が必要だ」

鈴
「なっ！！」

いきなり雄二に浴衣を着てムッツリーニの写真撮影をしろと言われて驚いた様子を銀時はみせる。

鈴
「だ、誰か写真撮影なんかさせるかよ！！金を貰えるなら良いが、金を貰えないなら絶対に嫌だ！！第一、何で俺の写真が作戦に必要何だよ、関係があるのかよ！！」

雄二

「いいや関係はあるぞ。男子生徒全員が覗きを誘うのは鈴の際どい写真を撮って劣情を誘う必要があるんだよ」

まるで子供を諭す様に雄二は銀時に言う。
その傍、ムッツリーニは写真撮影の準備をしていた。

雄二
「それにムッツリーニと既に鈴の際どい写真と交換の約束してるからな」

明久
「そうだよ鈴。約束は守らなきゃいけないよ」

鈴
「それはお前らが勝手に……」

明久（雄二）
『『鈴……』』

雄二と明久は銀時の肩に優しく手を乗せる。

明久（雄二）
『『人生は諦めるのか肝心だぞ☆』』

鈴
「ふ、ふざけるなぁーーーッ！！」

明久
「工藤さん。鈴に浴衣を着せてくれないかな（無理矢理）」

工藤
「良いよ。それじゃあトイレに行こうか。鈴ちゃんが男子達を魅惑が出来る様にゴーディネートをしてあげる？」

鈴
「や、止めろ……近づくな……あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“あ“」

銀時の悲鳴が夜の合宿所に響いたのであった。

おまけ

咲夜「かなり更新が遅れてすいませんでした。今月はもう一話くらい投稿したいですけど、もう年末が近いので仕事がかなり忙しくなるので更新が出来なかったらすいません」

鈴「んじゃ、次回予告するぞ。次回は『探偵物では真犯人が身近の人の場合が多いよね』でテイクオフ！！」

第十訓　作戦に犠牲がつきものだ（後書き）

ガーン……せっかくお気に入り登録の人数が戻ったと思ったらまた減ってしまった……増えるのは嬉しいが減ると悲しくなりませんか

第十一訓　探偵物では真犯人が見近の人の場合が多いよね（前書き）

咲夜「うーん……」

鈴「どうしたんだ作者？」

咲夜「いや、銀さんが女になったのは良いけど、銀さんとキャラがうまく立っていない気がするんですよ」

鈴「どういう意味だ？」

咲夜「色気を出したり、無防備だったり、女の武器？を使ったりするから銀のキャラがちゃんと立っているかなと最近不安なんです」

鈴「俺が女になってキャラがちゃんと立っているか気になるなら俺の男に戻せばいいだろ」

咲夜「いえ、貴方を男に戻す予定は今のところないのでいい加減に諦めて下さい」

鈴「テメぇ……」

咲夜「ですから、ちゃんと女になっても銀さんらしさはちゃんと出ているか、銀さんがセクハラを受けたり、女の色気を使うのはどう思うか感想を下さい」

鈴「それではリリカル銀魂始まるぞ」

第十一訓　探偵物では真犯人が見近の人の場合が多いよね

合宿四日目

雄二
「今日は合宿最終日だ、良いか！！必ず犯人を捕まえるぞ！！」

男子三人
『『『おお――――――――――――――ッッッ！！！』』』

今日は作戦決行当日。
明久達はとってはこれが最初で最後のチャンスなので自然に力が入るのは無理はない。

雄二
「それでムッツリーニ。昨日撮った写真は現像出来ているか」

ムッツリーニ
「……（コクン）徹夜で仕上げた」

と、言いながらムッツリーニはポケットの中から作戦に必要な五枚の写真を取り出した。

雄二
「確認させて貰うぞ……うおッ！！すげぇぞッ！！この写真！！」

明久
「えっ？一体どんな凄い物が写っていたのは？僕にも見せてよ……
……って、本当に凄いよこの写真！！」

秀吉
「どれどれワシも見せてほしいのじゃ……！！、た、確かにこの写真は凄いのじゃ！！」

明久達三人の顔がムッツリーニが撮った写真を見て顔を真っ赤にする。
明久やムッツリーニはともかく、常識人である秀吉でさえ、赤面させるほどの撮られた写真は一体どんな物だと言うと、

一枚目

膝立ちで浴衣姿&胸チラ、涙目（目薬で偽装）で上目遣いをしており、長い髪を下ろしている写真だ。

評価

銀時の上目使い&浴衣姿で胸元が少しはたけているので胸の貧乳がベストマッチしているうえ、いつもポニーテールに結っている髪を下ろしていることも上乗せされて師匠も唸るほどの一品になっている。

二枚目

布団で仰向けに寝ており、カメラ目線で浴衣の間から綺麗な足が見えている写真だ。

評価

先ほどと同じ様に涙目でカメラ目線&浴衣の間から綺麗な足が見えている為、男の本能をくすぶる写真になっている。

三枚目

昨日の作戦会議で撮った銀時のパンチラ写真。

四枚目

初日に電車の中で銀時が雄二に押し倒された（勿論フレームから外

している）かなり際どい写真だ。

五枚目

二日前に銀時が寝ている姿を撮ったかなり色っぽい写真だ。

明久
「こ、これなら他のクラスの人達やクラスメイト達も協力してくれるよ！！」

ムッツリーニ
「……もしこの写真を見ても協力しない奴は男じゃない」

明久とこの写真の撮影兼現像者であるムッツリーニでも完全に興奮している。

ちなみにあんなに嫌がっていた銀時が写真撮影を許可した理由は秀吉からファミレスの特大チョコレートパフェとイチゴ牛乳を奢るといったらあっさり許可をした。

銀時いわく

「チョコレートパフェの誘惑には勝てなかった」

らしい。

雄二
「しかし本当に凄い写真だ……俺でも何というか……色々あるぞ」

雄二はムッツリーニが撮った刺激的過ぎる写真を見て顔を真っ赤にしている。
見た目のわりには意外と雄二は純情であった。

雄二
「って、いい加減無駄話はこれぐらいにして早く作戦の為にクラスの連中を勧誘をするか」

と、雄二は言いながら例の写真を須川に回す。
もちろんこの写真を見て盗む輩が現れない様にちゃんと写真の裏に注意書きを書いた。

『この写真を他の男子生徒全員に回すこと、絶対に女子や教師に見つからない様にしてくれ。尚、この写真が欲しい奴は今夜、俺達がやる覗き作戦に参加してくれ、報酬はその後にある理想郷の光景と全員にこの写真をプレゼントしてやる。もし俺達に協力をしようと

せずに盗んだ奴は坂本雄二の名の下に処刑する』

須川
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッッ！！！！！」

さっきまで眠そうな顔をしていた須川が例の写真を見て覚醒していた。
それと同じ様にクラスメイトダウンや他のクラスの奴らも眠気が吹き飛び興奮していた。

雄二
「よし、これで今夜の作戦の参加メンバーはこれで揃ったな。次に俺達がすべき事は」

明久
「今夜に行われる教師達の対決に備えて回復試験を受けて点数を稼ぐ、でしょ」

雄二
「ほぉ～、分かってるじゃなねぇか、明久」

明久
「まぁね……鈴や他の皆がこんなに協力してくれているのに失敗するわけにはいかないよ」

雄二
「……そうだな」

いつも中が悪い雄二と明久の意見が珍しく合う。
雄二は口に出さないがおそらく明久と同じ事を思っていたんだろう。

秀吉
「……ムッツリーニよ。お主に少しお願いがあるんじゃか」

ムッツリーニ
「……なんだ秀吉」

秀吉
「先程の鈴の写真は全部でいくらかのう」

ムッツリーニ
「……一枚五百円だか、いつも秀吉には世話になっているから全部で五百円で良い」

秀吉
「買ったのじゃ！！」

なんて取引をされていた事に銀時は気付いてはいない。

夜。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7064v/

リリカル銀魂　Ｓｔriker～侍少女と召喚獣

2011年12月15日01時49分発行